

316
250

m 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10⁶m 1 2 3 4 5

始



316

250

特 230
384

警視廳防疫課長
東京看護婦學校講師
井口乘海著

理髮衛生講本



全

解剖生理學
理髮傳染病學
理髮衛生學

理髮細菌學
理髮店舖衛生法



序

私は警視廳に奉職すると間もなく、理髮店舗の視察を命ぜられた。其際自分の視察は決して形式的にやつてはならぬ、これに依つて理髮業者諸君の向上を促し、理髮店舗の改善を計りたいものだと考へたのでありました。斯く決心して任務に就いた爲、業者諸君の眠を醒さんとする警鐘は時に言葉の先に洩れ、理髮業界の前途を思ふ熱情は動作の上に表はれ、これが爲一部業者諸君の反感を買つたけれども又先覺者が自ら省らるゝ様になり、業界は非常に進歩發達して參つたのであります。今日此改善されたる状態を見て、私としては今昔の感に堪えないものがあります。

回顧しまするに、斯く業界が進歩改善せられたる要素は種々ありませうけれども、先づ第一に擧げなければならぬのは、到る處に理髮學校、講習會、研究會の開かれた事であり、何事も理解せしむるに限ると云ふ私の信念から、講壇に立ちたること無慮数千回、本書は實に其講本の一部であります。今日迄も既に數萬の業者諸君の参考となりしのみならず、今後も更に數十萬の業者後進の座右の友となり、業界改善の一助ともならば、私の至幸とする處であります。

大正十三年七月二十四日 亡き母の命日に際して

井 口 乘 海

お 断 り

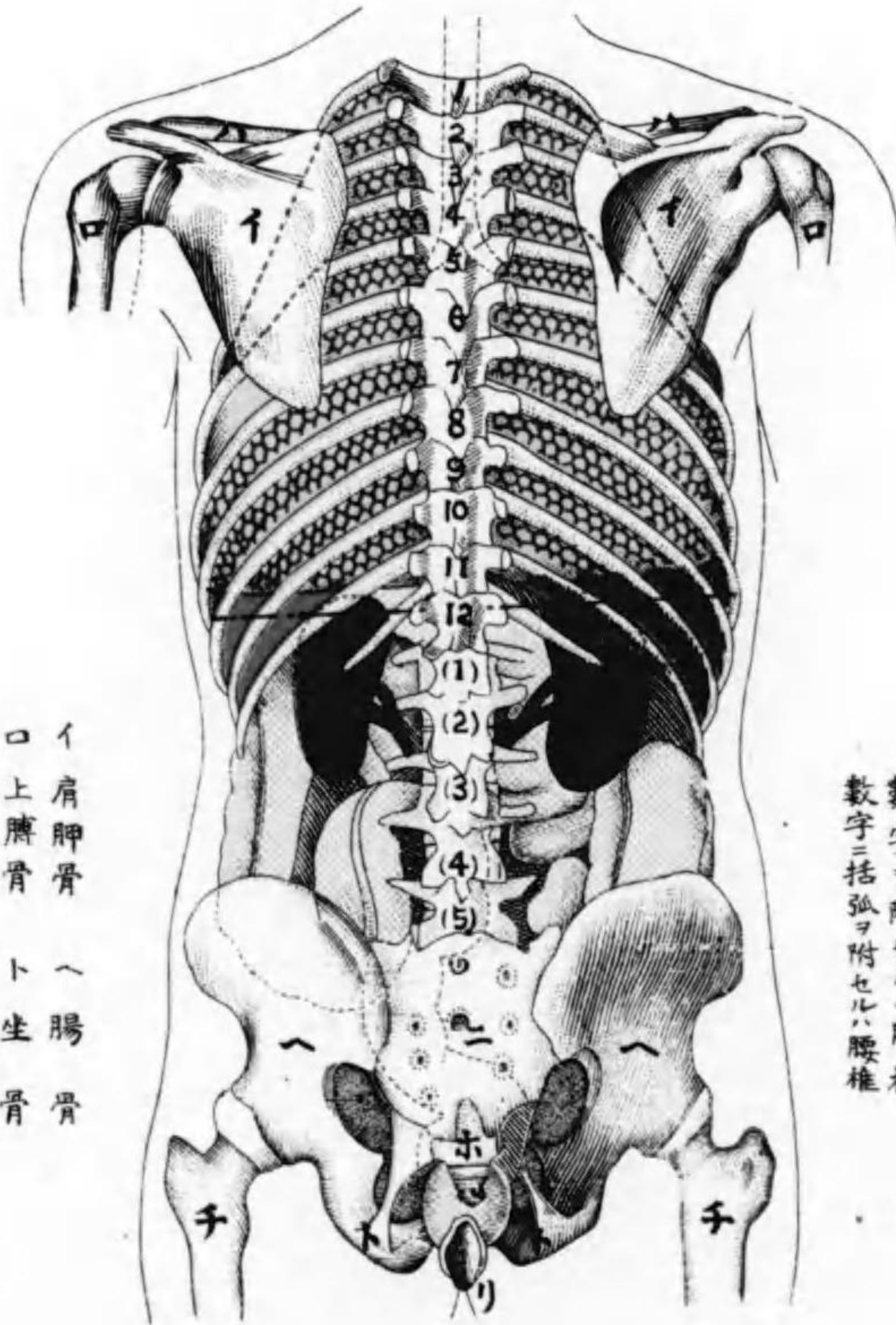
- 一、本書には、解剖生理學と理髮傳染病學とを書いたのであるが別に細菌學、衛生學、理髮店舖衛生法を、追つては美容醫學のやうなものも刊行する考である。
- 二、本書の振假名は、専ら讀み良い様にとの考から、發音通りに付けてある、従つて假名遣ひ法に背いてゐる點は已むを得ない事である。
- 三、本書の挿畫就中傳染病學の附圖には、随分多大の資を費して印刷したのである、これは本當に理解せしむるには畫によらねばならぬとの考から致したのであるが、これが爲に價の高くなつた事も已むを得ないので、此點は特に私の心を汲んで、お讀みを願ひたい。

今や第三版を刊行するに當り、從來の解剖生理學、傳染病學の他に、細菌學、衛生學並に理髮店舖衛生法を書き加へ、全一冊として本書を完結する事に致しました、然し未だ不備の點も多く、又中には誤まれる處もあらうと思ひますから、お氣付の點は幸に叱正せられまして、本書が他日眞に完成の域に達するやう御力添下さる事を御願致します

昭和二年八月

井口乘海

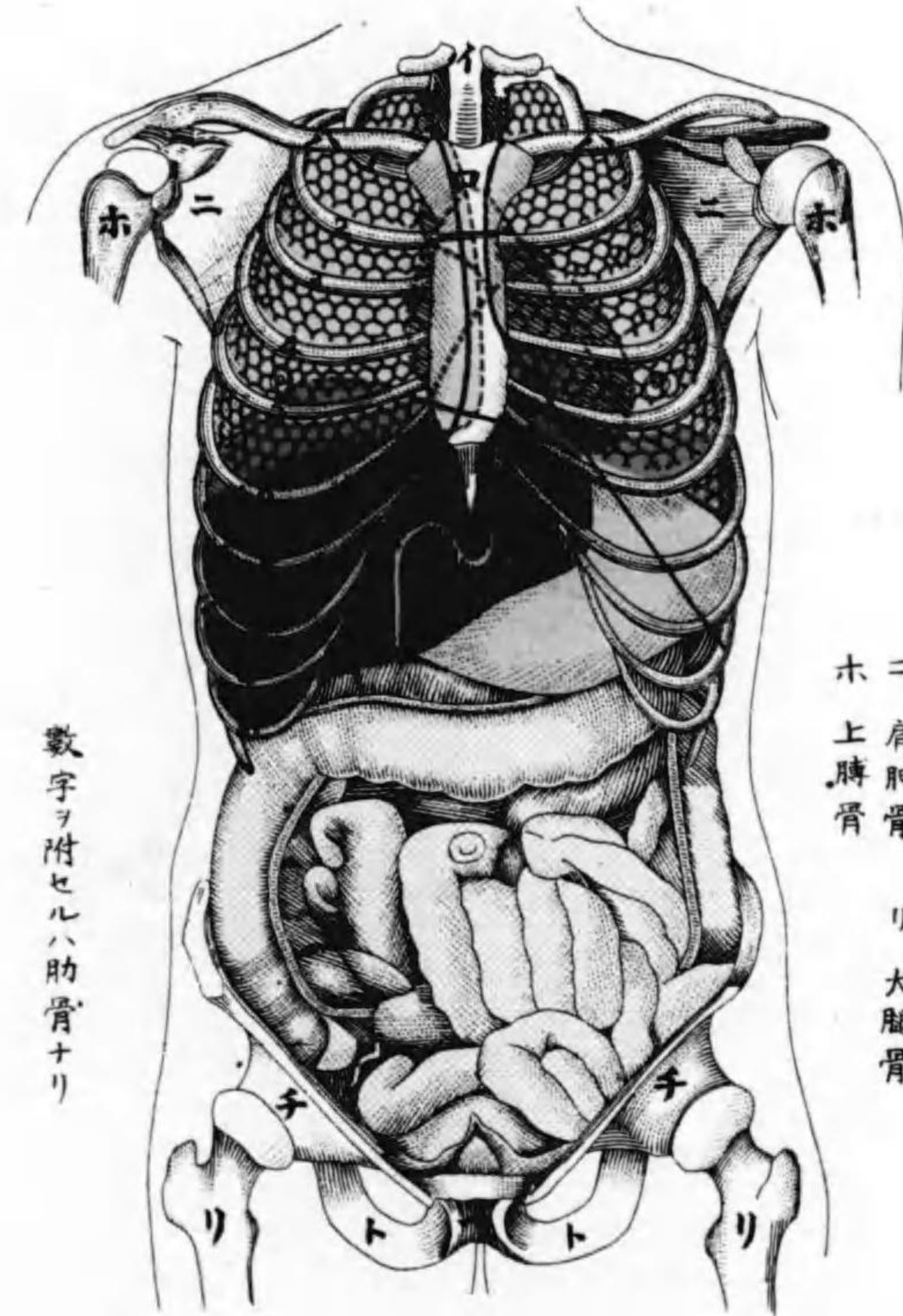
臓内腔腹胸
(面後の體身)



イ 肩胛骨
ロ 上臑骨
ハ 鎖骨
ニ 薦骨
ホ 尾闕骨
チ 子
ト 子
リ 子

数字ヲ附セルハ胸椎
数字ニ括弧ヲ附セルハ腰椎

臓内腔腹胸
(面前の體身)

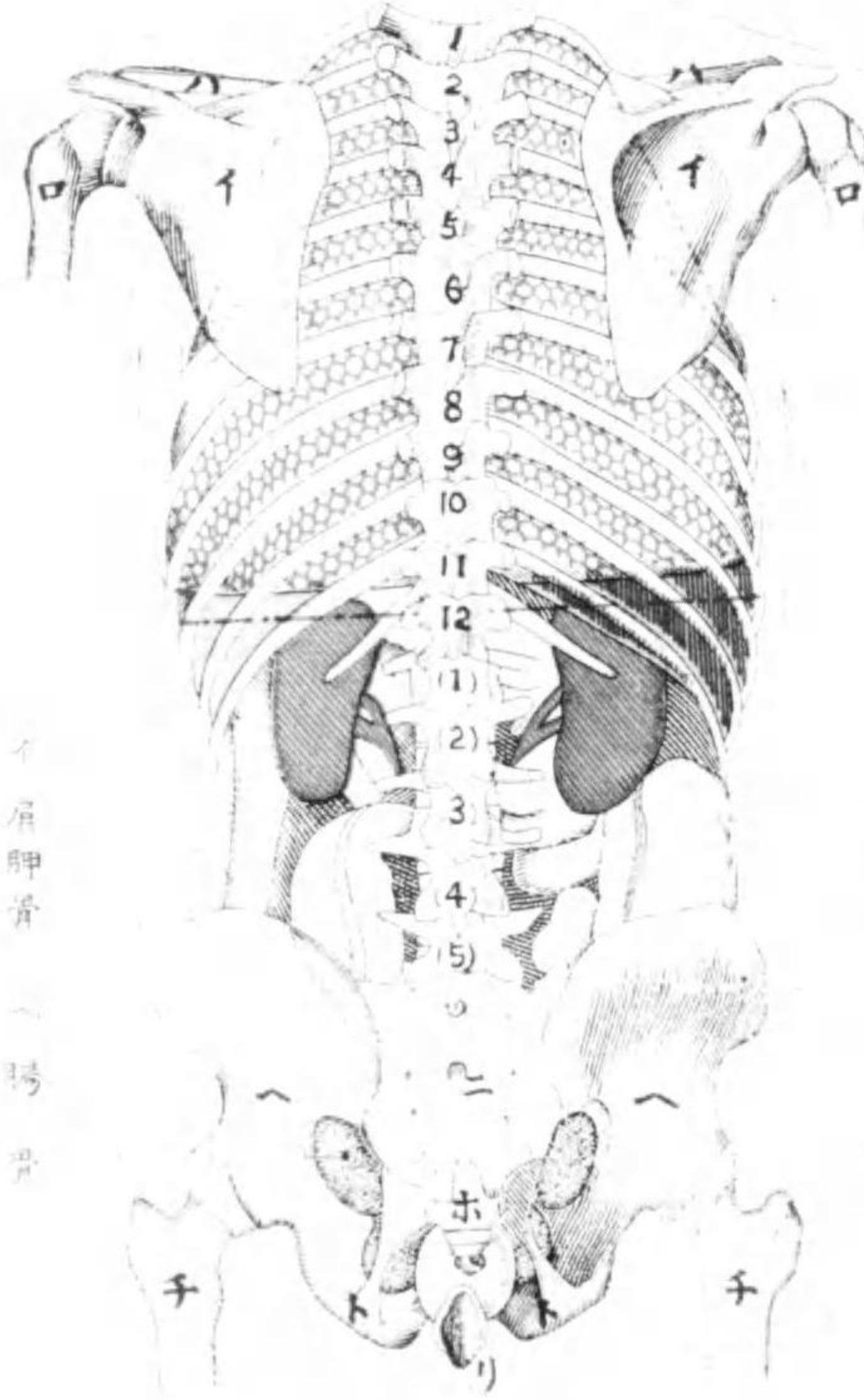


イ 脊椎骨
ロ 胸骨
ハ 鎖骨
ニ 肩胛骨
ホ 上膊骨
チ 子
ト 子
リ 子

数字ヲ附セルハ肋骨ナリ

胸腹腔内臓

(身体の後面)



イ 肩胛骨
ロ 上腕骨
ハ 鎖骨
ニ 肋骨
ホ 肩胛骨
チ 肋骨
リ 肋骨
ト 肋骨
ク 肋骨
ケ 肋骨
コ 肋骨
カ 肋骨
キ 肋骨
ク 肋骨
ケ 肋骨
コ 肋骨
カ 肋骨
キ 肋骨

数字は胸椎の順序
数字は肋骨の順序

胸腹腔内臓

(身体の前側)



イ 肩胛骨
ロ 胸骨
ハ 鎖骨
ニ 肋骨
ホ 肩胛骨
チ 肋骨
リ 肋骨
ト 肋骨
ク 肋骨
ケ 肋骨
コ 肋骨
カ 肋骨
キ 肋骨
ク 肋骨
ケ 肋骨
コ 肋骨
カ 肋骨
キ 肋骨

数字は胸椎の順序
数字は肋骨の順序

解剖生理學

解剖生理學目次

第一章 人體の組織……………	一	第六章 消化器……………	二六
第二章 人體各部の名稱……………	三	第七章 呼吸器……………	四〇
第三章 骨……………	一〇	第八章 血行器……………	四八
第四章 筋 肉……………	一八	第九章 泌尿器……………	六二
第五章 皮 膚……………	二二	第十章 神経系……………	六七
		第十一章 五官器……………	七九

解剖生理學

第一章 人體の組織

人體は細胞と細胞間質と云ふものから組み立てられてゐて、之れを次の如く分けることが出来る。

第一 硬組織

- (1) 骨
- (2) 軟骨
- (3) 歯牙

第二 軟組織

- (1) 皮膚及粘膜
- (2) 漿液膜
- (3) 結合組織
- (4) 脂肪組織

解剖生理學目次

第一章 人體の組織	一	第六章 消化器	二六
第二章 人體各部の名稱	三	第七章 呼吸器	三〇
第三章 骨	一〇	第八章 血行器	三八
第四章 筋	一八	第九章 泌尿器	三三
第五章 皮膚	二二	第十章 神経系	三七
		第十一章 五官器	三七

解剖生理學

第一章 人體の組織

人體は「細胞」と「細胞間質」と云ふものから組み立てられてゐて、之れを次の如く分けることが出来る。

第一 硬組織

- (1) 骨
- (2) 軟骨
- (3) 齒牙

第二 軟組織

- (1) 皮膚及粘膜
- (2) 漿液膜
- (3) 結締組織
- (4) 脂肪組織

第一 頭首

第二章 人體各部名稱

- | | | | | | | | |
|---------|------|------|-------|---------|-------|-------|-------|
| (乙) 顔面部 | | | | (甲) 頭蓋部 | | | |
| 八 口部 | 七 頰部 | 六 耳部 | 五 顚骨部 | 四 顚顚部 | 三 後頭部 | 二 顚頂部 | 一 前頭部 |
| | | | 四 鼻部 | | | | |
| | | | 三 眼部 | | | | |
| | | | 二 眉間 | | | | |
| | | | 一 前額部 | | | | |

第三

液體組織

- | | | | | | | |
|----------|---------|--------|-----------------------|--------|---------------|-----------|
| (3) 腦脊髓液 | (2) 淋巴液 | (1) 血液 | (8) 內臟(消化器・呼吸器・泌尿生殖器) | (7) 神經 | (6) 心臟・血管及淋巴管 | (5) 筋肉及靱帶 |
|----------|---------|--------|-----------------------|--------|---------------|-----------|

第二 頸部

- 一、前頸部
- 二、後頸部(項部)
- 三、側頸部

九、頤部
十、顎部

第三 軀幹

- (乙) 腹部
- (一) 前腹部
 - 一、上腹部(心窩部又は胃部)
 - 二、中腹部(臍部)
 - 三、下腹部
 - 腸骨部
 - 鼠蹊部
 - 陰部
 - (二) 後腹部
 - 一、腰部
 - 二、薦骨部
 - 三、臀部
 - 四、會陰部
 - (三) 側胸部
 - 脇又は腋下部とも云ひ
 - 上部に腋窩あり

第四 上肢

- (一) 上膊部
- (二) 前膊部
- 肘部(肘窩)
- 一、尺骨側
- 二、橈骨側

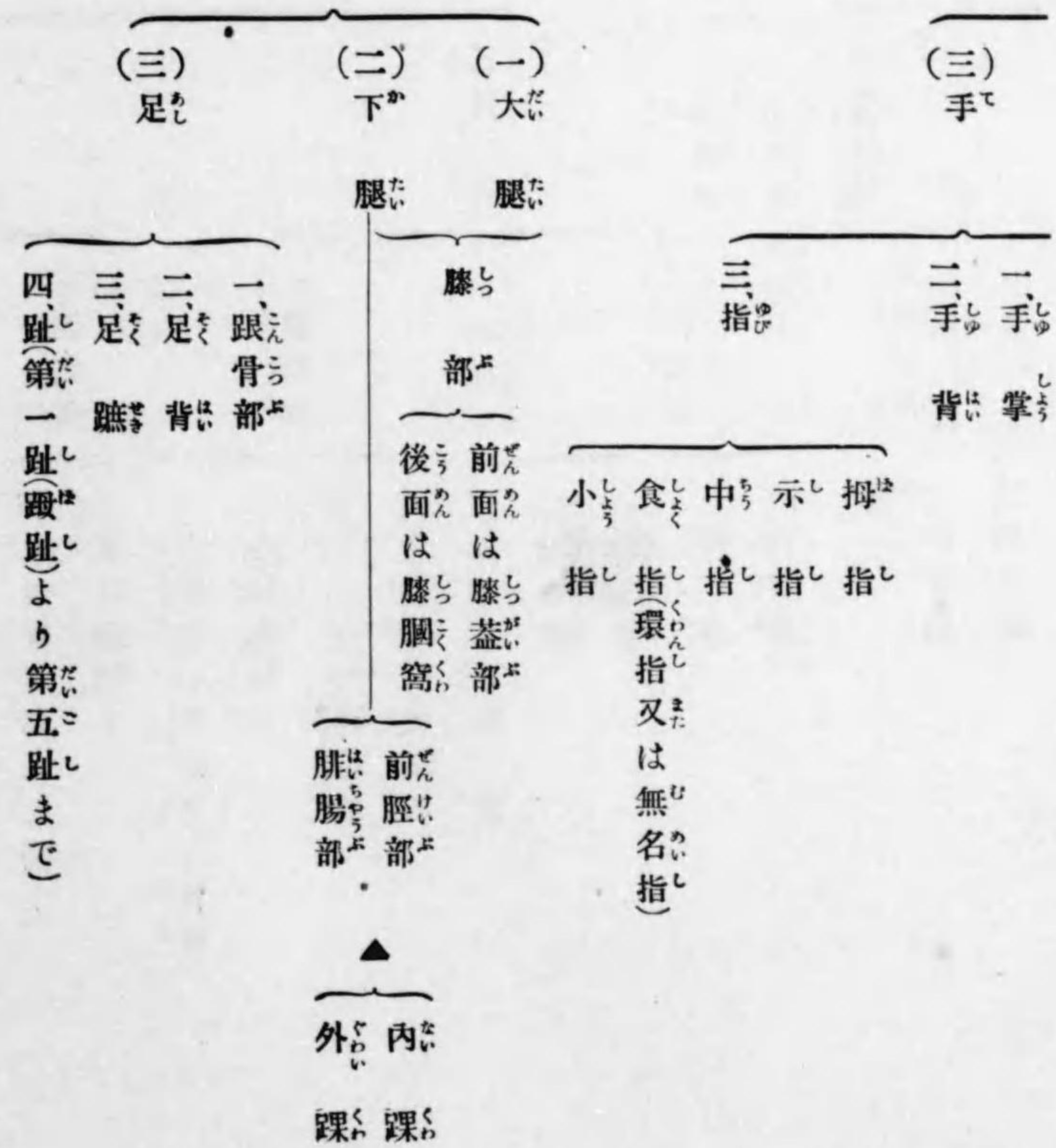
(甲) 胸部廓

- (一) 前胸部部
 - 一、胸骨部
 - 二、肋骨部
 - 三、鎖骨部
 - 四、心臟部
 - 五、季肋部
- (二) 背部部
 - 一、脊柱部
 - 二、肩胛部
 - 三、肩胛間部
 - 四、肩胛下部

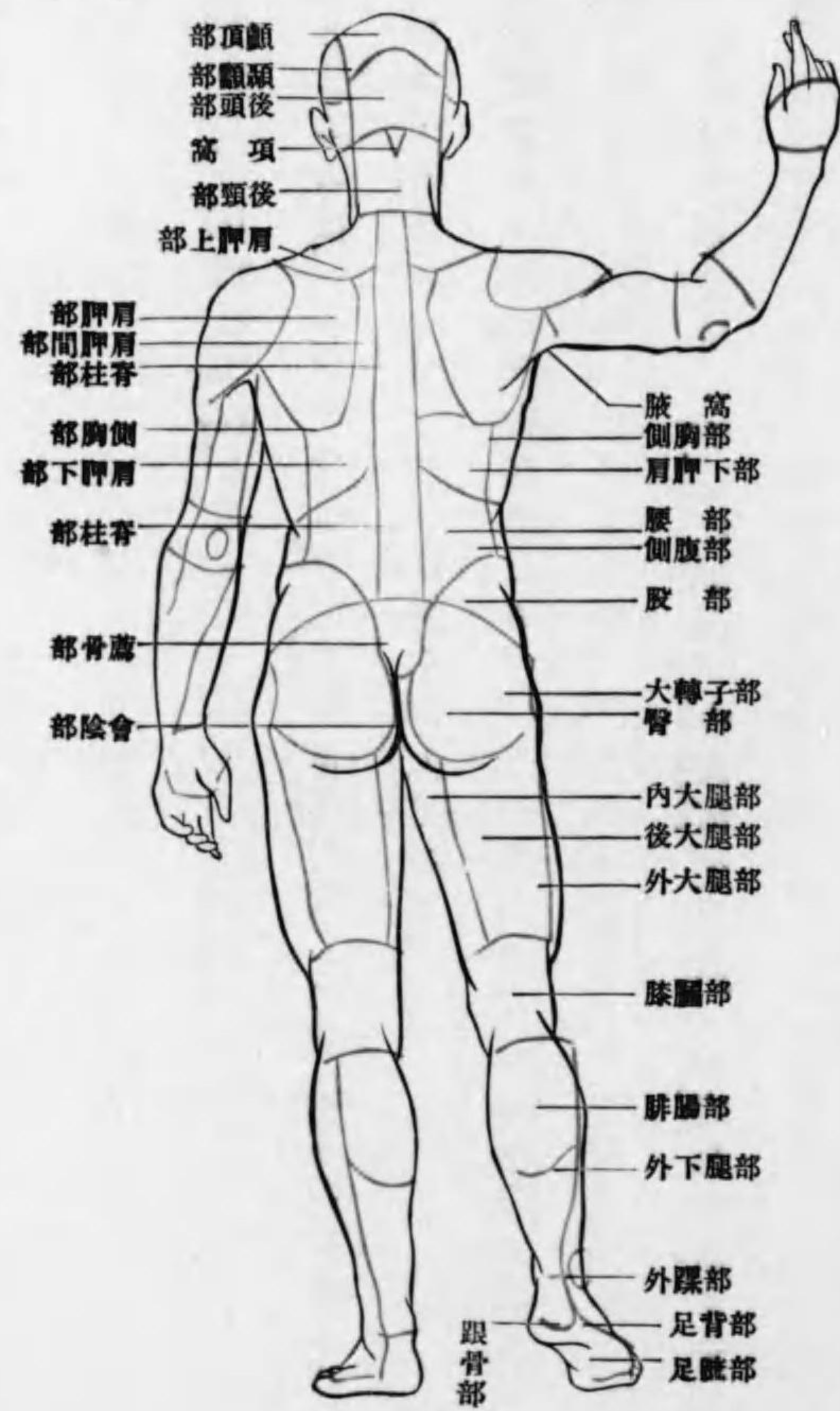
頭部頸部及胸部前側面ヨリ見ルニ



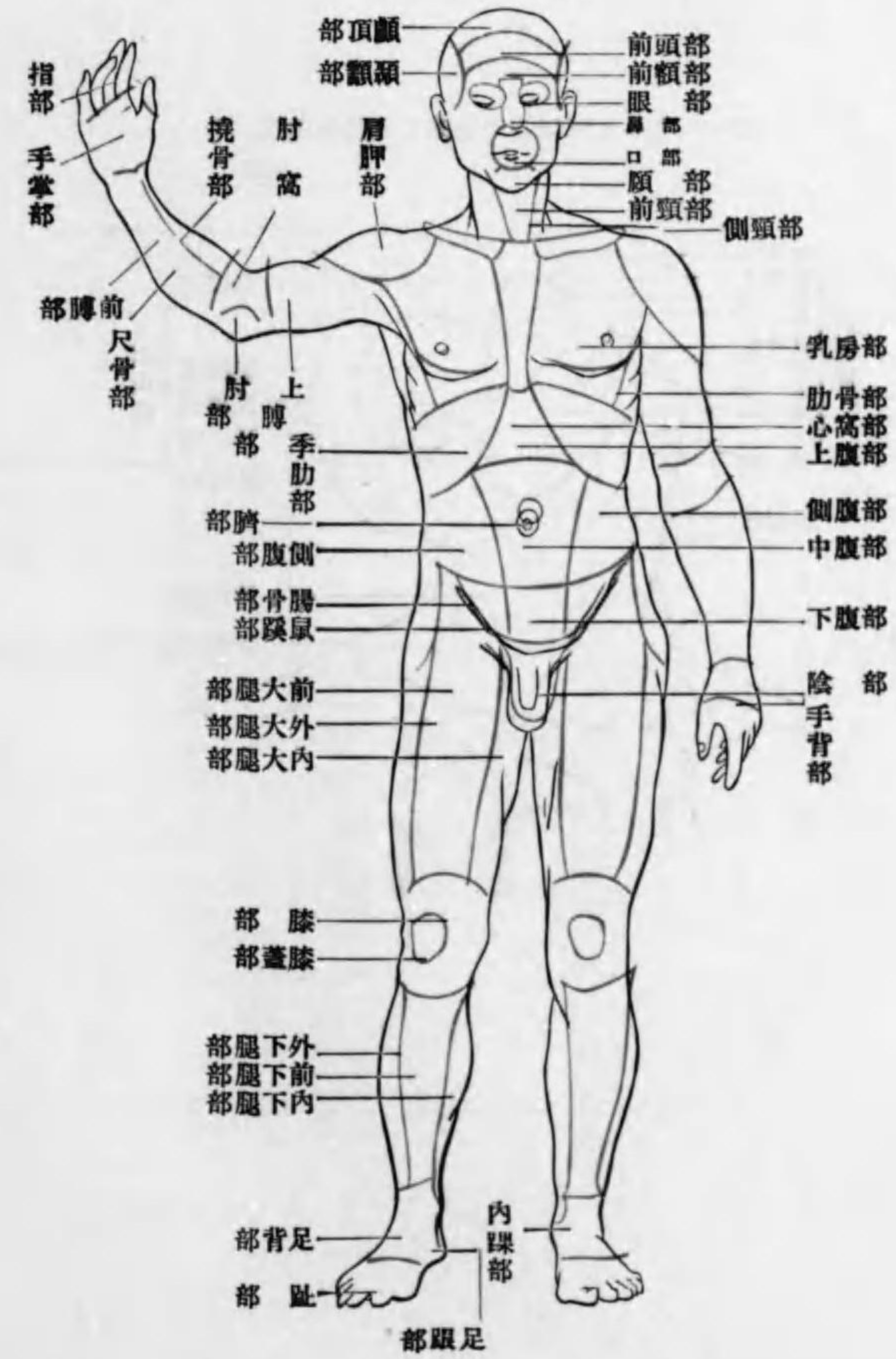
第五 下肢



圖ルタ見リヨ方後ヲ體身



圖ルタ見リヨ方前ヲ體身



第三章 骨

解一〇

一 骨の目的

- (1) 骨格を作つて、身體の支柱となる。
- 〔骨格〕と云ふのは、一つ一つの骨が互に相連つたものを云ふのである。
- (2) 大切なる器官(腦とか心臓など)の保護をなしてゐる。
- (3) 身體を運動させる役目を帯びてゐる。

二 骨の形状

- (1)〔長骨〕管狀骨とも云ひ、手足に多い、中央部を「骨體」、兩端を「骨端」と云ふのである。
- (2)〔短骨〕手腕・足跗などにある
- (3)〔扁平骨〕頭蓋骨・肩胛骨などで扁平なるものである。

三 骨の構造

- (1)〔骨膜〕骨を包んでゐる薄い膜で、骨を養ひ又骨を作るものである。
- (2)〔硬固質〕骨の外面にあり、緻密で固いのである。
- (3)〔海綿質〕骨の内部であつて、海綿狀をなしてゐる。
- (4)〔骨腔〕主として長骨の内にあるので、其中に「骨髓」を入れてゐる。
- (5)〔栄養孔〕骨には小さい澤山の孔がある、この孔は骨を養ふ血管の出入するものである。

四 骨の成分

- (1)〔膠質〕年の若い人に多く、骨の曲り撓むのは此膠質が多いからである。
- (2)〔石灰質〕老人に多く、骨が脆くなる、それであるから老人は骨折し易いのである。

以上の外(3)水とか、(4)鹽類とか云ふものも含んでゐる。

解一一

五骨の联接

(1) 關節 二つ以上の骨が集つて運動をする所である。
例へば「肩關節」「肘關節」などである。

(2) 軟骨接合 二つの骨の間に軟骨のあるもので、「肋骨と胸骨の間」「耻骨軟骨接合」などである。

(3) 骨縫 二つの骨が噛み合つてゐて少しも運動しないもの、「前頭縫合」の如きもの。

關節

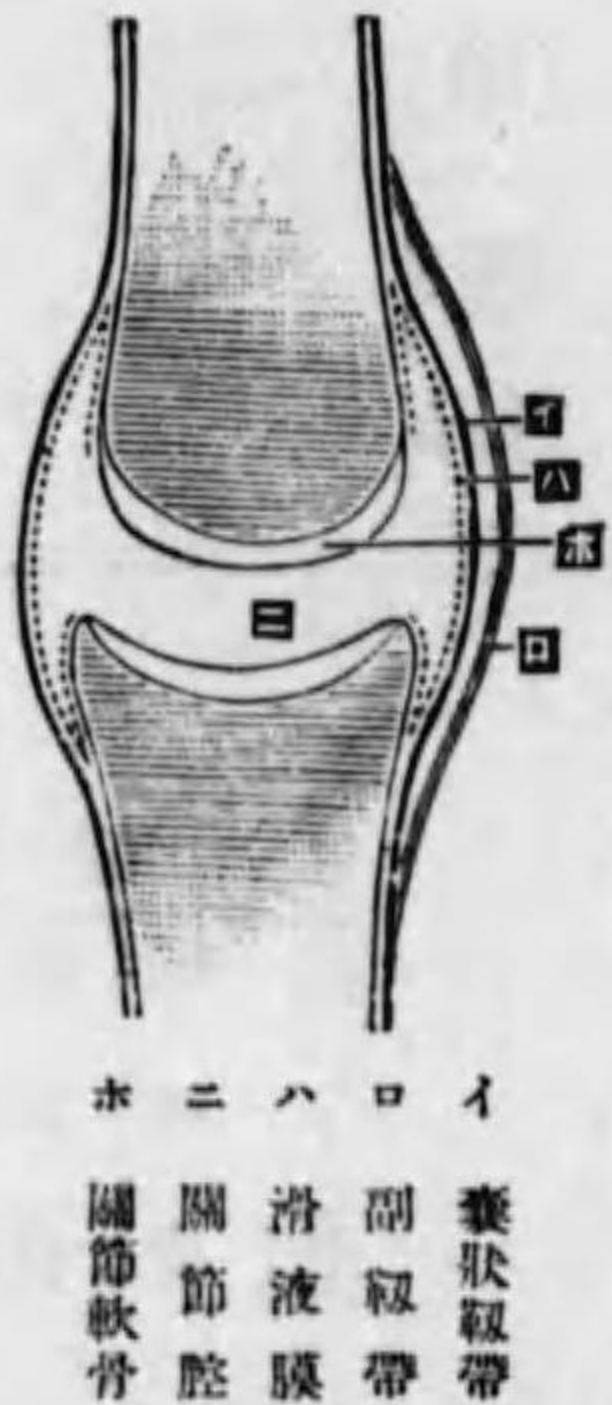
(1) 構造

(イ) 二骨又は數骨相集まりて形成し運動をなす。
(ロ) 骨端は「關節軟骨」によりて被はれ、且つ「關節囊」により包まれ、其内に關節腔を作る、腔の内面に「滑液膜」ありて「滑液」を分泌し、骨端の摩擦を防ぐ。

(ハ) 關節囊の外部は副韌帶等ありて之を保護し、過度の伸展を制限す。

(2) 種類

(關節ノ内面)



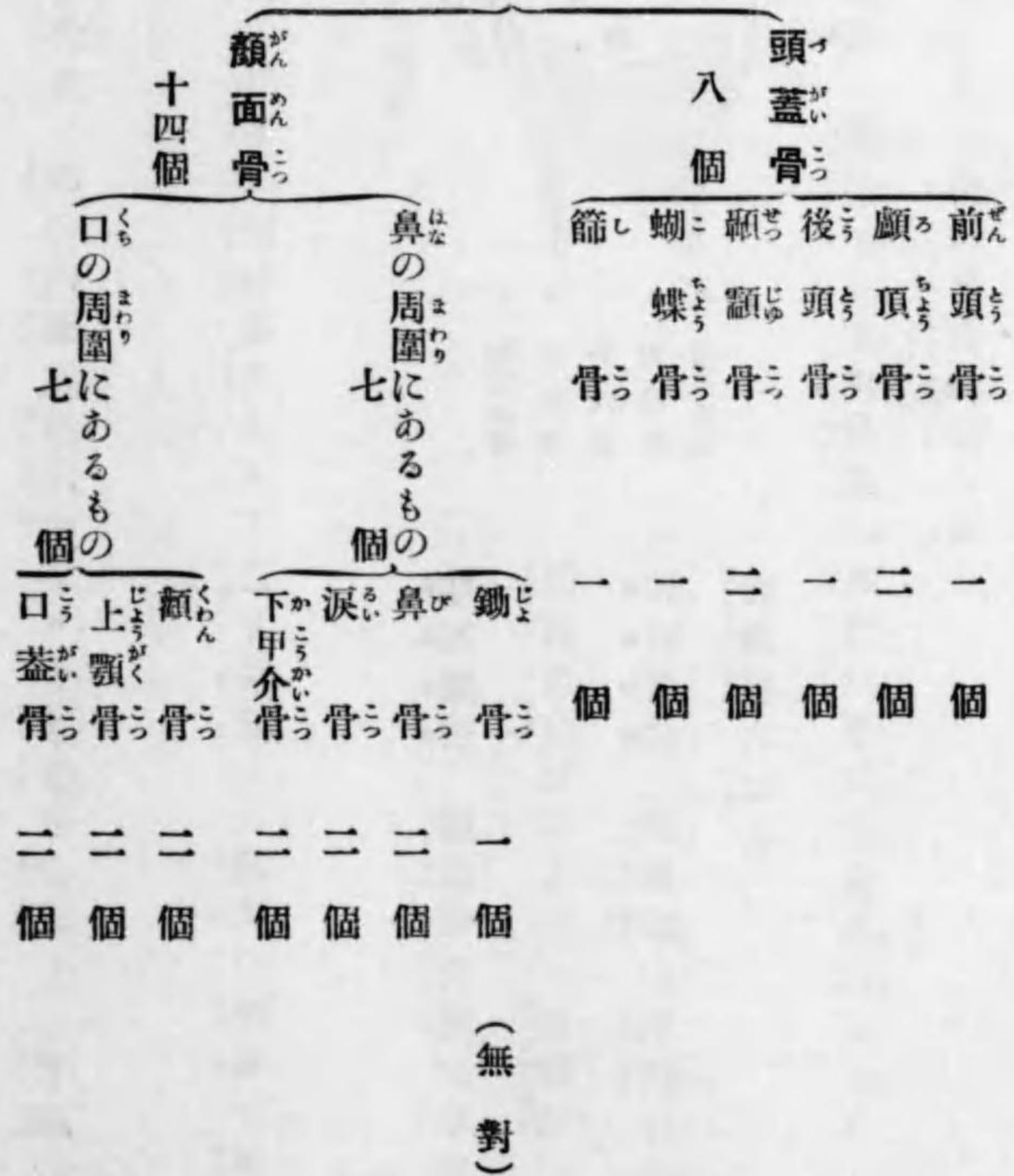
(イ) 球窩關節、關節頭及窩が球狀をなし、運動自由なるもの、肩關節の如し
(ロ) 顆狀關節、關節頭の顆狀なるもの、下顎關節の如し

(ハ) 鞍狀關節、關節をなす兩骨端の鞍背狀をなせるものにして、屈伸及内外轉をなす、拇指掌骨關節の如し
(ニ) 蝶番關節、唯屈伸の用をなすもの、膊肘關節の如し
(ホ) 車軸關節、骨軸に沿うて廻轉するもの、第一第二頸椎間の關節の如し

六骨の名稱

(一) 叢合關節 微弱の運動を營むもの、腕骨及跗骨相互間の如し

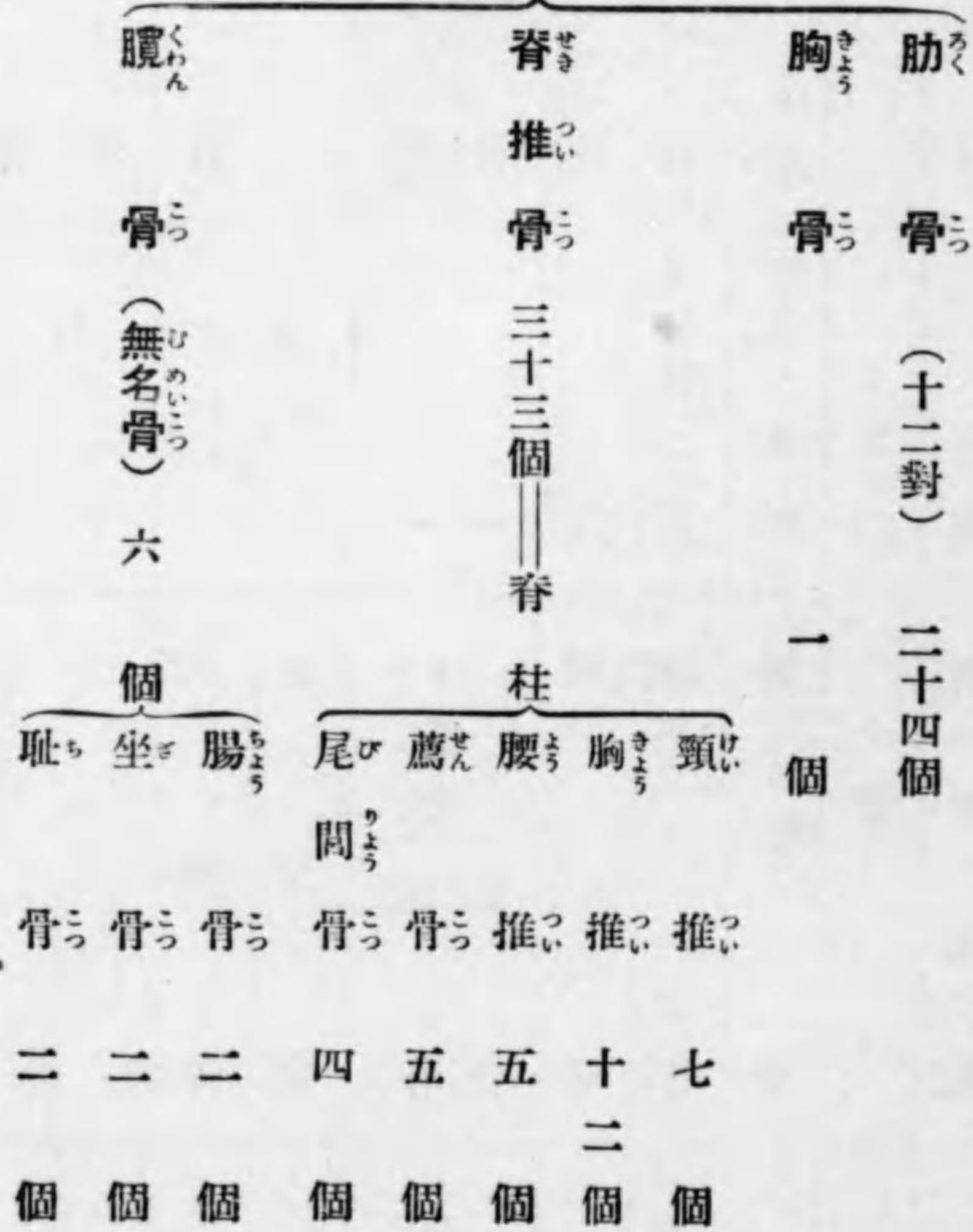
(甲) 頭首



以上二十二個の外、耳骨六個、舌骨一個及齒牙三十二個がある

(下) 顎骨 一個 (無對)

(乙) 軀幹



(丙) 上肢と下肢

軟骨

兩上肢計	指	掌	腕	前胸骨	尺撓骨	上腕骨	鎖骨	肩胛骨	上肢の名稱	片手の數
六四	一四	五	八	一一		一	一	一		
兩下肢計	趾	蹠	跗	下腿骨	腓脛骨	膝蓋骨	大腿骨	下肢の名稱	片足の數	
六〇	一四	五	七	一一		一	一			

一性狀

黄白色、稍透明で弾力に富むのである

二作用

- (1) 骨端にあつて、相互の摩擦を防ぐこと(骨間軟骨)
- (2) 身體の或部に於て弾力を必要とする處を組立て、一定の形狀を保つてゐる
(鼻尖端、耳、氣管等)
- (3) 僅かの運動をなすこと

第四章 筋 肉

解一八

一區 別

(甲) 〔横紋筋〕

(イ) 俗に「肉」と云つて居るもので丈夫である、大抵は骨に附着し、収縮したり、伸展したりして骨を動かす、其の結果身體を運動せしめてゐるのである。

(ロ) 此筋肉は意に従つて働くから「随意筋」と云ふのである。

(乙) 〔滑平筋〕

(イ) 内臓を作つて居る筋で丈夫でない、又意の思ふまゝにならぬから「不随意筋」と云ふ。

(ロ) 此滑平筋は血管・気管・食道・胃腸腎・孟輸尿管・膀胱尿道・生殖器等を造つてゐる。

るのである。

「例 外」

心臓は内臓の一つであるけれども、横紋筋から成つて居るが、然も不随意筋である。

二横紋筋の作用

(1) 運動に與かること

筋肉が収縮し、伸展して骨を動かす、身體を運動させる。

(2) 血行を助くること

筋肉の伸び縮みによつて、血液循環を良くする。

(3) 容を整へること

(4) 外力が襲つて來た時之れを防いで、骨や血管・神経等の傷つかぬやう守る役目をしてゐる。

解一九

三、筋肉の養生法

- (1) 筋肉は鍛練する程丈夫になるのであるから、適度の運動によつて發達せしむること、然し過激なる運動は、却つて筋を傷つけるものである。
- (2) 全身の筋肉は平均して發達せしめなければいけない。
- (3) 筋肉を疲勞せしめた後は入浴して休養すること。

腿

- 一、筋が骨に附着するの媒介をしてゐる、白色で頗る丈夫ではあるが伸縮性はな
- い。
- 二、腦より發する運動の命令は、主として此の腿に来て筋の伸縮を起す。

靱帯

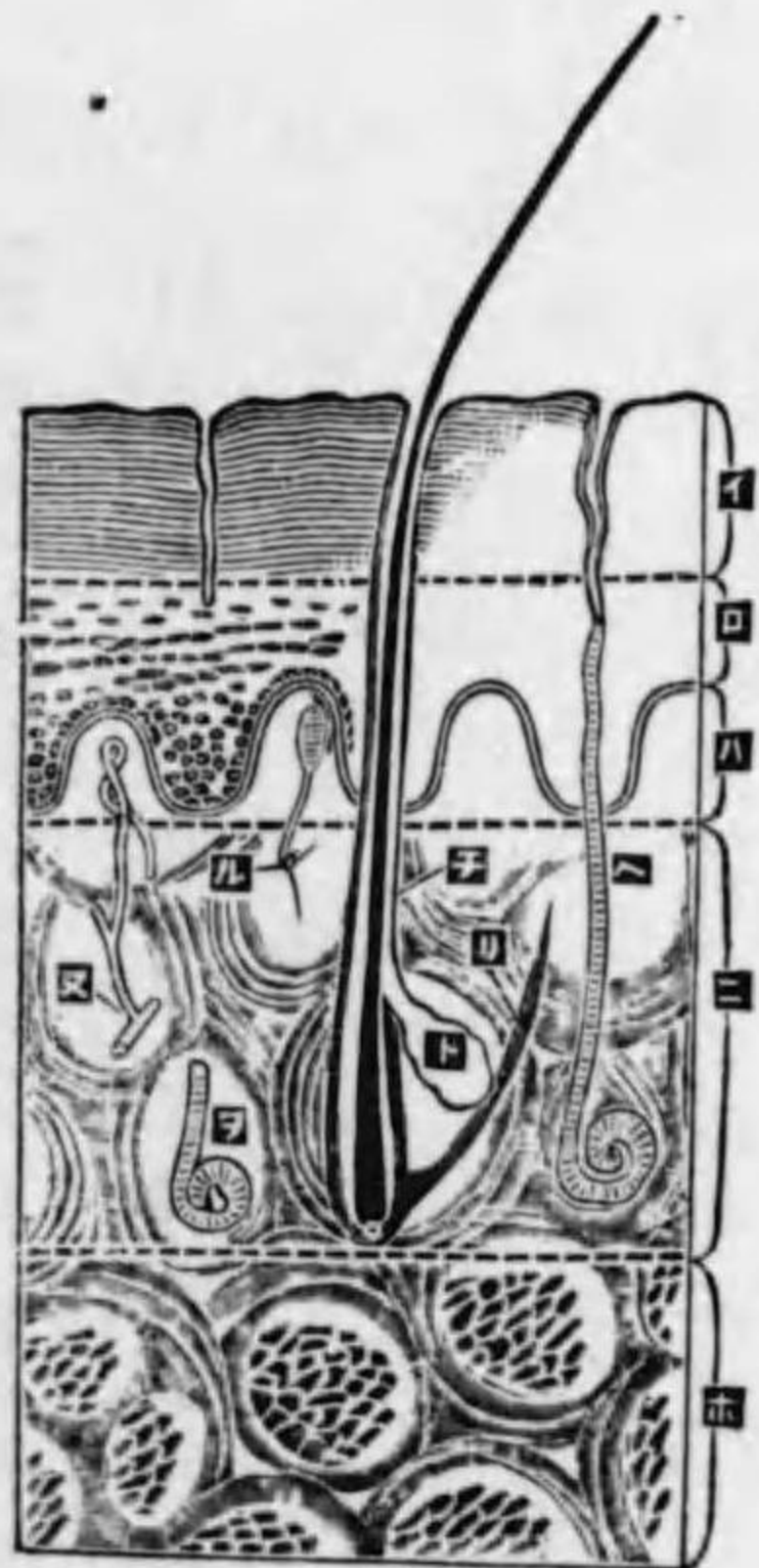
- 一、強靱なる結締織で、白色の光輝を有し、骨の联接を維持する作用を有つてゐる。

二、區別

- (イ) 〔囊狀靱帯〕 關節に於て、一方の骨の骨膜から他の骨の骨膜に延展し、關節を圍んで關節腔を作るものである。
- (ロ) 〔副靱帯〕 囊狀靱帯の外面又は内面にあり、關節の固定を助ける。
- (ハ) 〔固有靱帯〕 一骨の孔又は截痕の附近にありて、他骨に亘らないもの。

第五章 皮膚

一 皮膚の構造



イ 角層
ロ 表皮
ハ 乳頭層
ニ 網状層
ホ 皮下組織
ヘ 汗腺
ト 皮脂腺
チ 毛囊
リ 毛母細胞
ヌ 血管
ル 神経

皮膚の厚さは、
 表皮の厚さは、
 真皮の厚さは、
 皮下組織の厚さは、
 角層の厚さは、
 乳頭層の厚さは、
 網状層の厚さは、
 汗腺の厚さは、
 皮脂腺の厚さは、
 毛母細胞の厚さは、
 血管の厚さは、
 神経の厚さは、

二 皮膚の生理的作用
 (附屬物) 毛・爪・皮脂腺・肝腺等がある。

(1) 保護作用

身體の表面を被ひ、外界がら来る種々の刺戟を防いで、身體を守つてゐる。

(2) 體溫調節作用

(イ) 寒い時や體溫の發生少いとき、皮膚は收縮して體溫の發散を防ぎ

(ロ) 暑い時や體溫の發生多いときは、皮膚は擴張して體溫を發散せしめる

のであるが、これでも發散の充分でないときは、更に發汗して發散を計るのである。

(3) 觸覺作用

皮膚には知覺神經の末端があり、之によつて寒温精粗・痛痒・部位覺等を知るのである。

(4) 排泄作用

發汗によりて老廢物を出すのである。

(5) 【呼吸作用】

極めて僅ながら呼吸をしてゐる。

三 皮膚の養生法

- (1) 清潔にすること
- 度々入浴をなし、衣服、殊に肌着を取替へること。
- (2) 皮膚を丈夫にし、感冒を豫防すること。
- 毎朝冷水摩擦を行ひ、寝るとき起きたときに衣服を取り替へること。
- (3) 皮膚を傷つけたときは、消毒して繃帯をなしおくこと。
- (4) 石鹼化粧品等は精撰して用ゐること。
- (5) 爪は短く切り、手指は度々洗滌して、清潔ならしむること。

粘 膜

粘膜とは外界と通じてある腔の内面を被ふてゐるものであつて、構造は皮膚に

- 似てゐるが、(1) 赤色を呈してゐること、(2) 液を分泌して常に濕ふてゐること、
- (3) 軟かなることが變つてゐるのである。

第六章 消化器

〔名稱〕

- (イ) 口腔、(ロ) 咽頭、(ハ) 食道、(ニ) 胃、(ホ) 腸
- 小腸 — 十二指腸、空腸、廻腸。
- 大腸 — 盲腸、結腸、S字状部、直腸。

〔口腔内〕



- イ 上唇
- ロ 下唇
- ハ 齒
- ニ 咽頭
- ホ 懸壺垂
- ヘ 舌口蓋弓
- ト 咽頭口蓋弓
- チ 口蓋扁桃腺
- リ 舌背

第一節 口腔

一、口腔は消化器の最上部で、頬口唇齒槽

口蓋・口隔膜によつて組立てられ、咽頭峽によつて咽頭と境し、(イ)食物を取ること、(ロ)之を噛み砕くこと、(ハ)言語を造る役目を有つてゐる。

二、附屬物

(イ) 唾液腺(耳下腺・舌下腺・顎下腺)、(ロ) 扁桃腺、(ハ) 舌、(ニ) 齒牙。

三、唾液の作用

- (一) 食物に混じて、食物を滑にすること。
- (二) 含水炭素を「葡萄糖」にすること。
- (三) 口内を濕ふして其の運動を助けること。

四、齒牙

(一) 齒の目的

(イ) 食物を咀嚼すること、(ロ) 言語を造るのに與ること。

(二) 齒の構造

- (イ) 珐瑯質、齒冠の表面を被ふてゐるもの。
- (ロ) 白堊質、齒根の表面を被ふてゐるもの。
- (ハ) 象牙質、齒の内部を造つてゐるもの。
- (ニ) 齒腔、齒の中央にあつて「齒髓」を入れてゐる。

(三) 齒の數

名	稱	乳齒	永久齒	名	稱	乳齒	永久齒
門	齒	四	四	第一	大齒	一	二
犬	齒	二	二	第二	大齒	一	二
第一	小齒	二	二	第三	大齒(智齒)	一	二
第二	小齒	二	二	片顎計		一〇	一六

第二節 胃

一 位置

腹腔内に於て横隔膜の直ぐ下にあり、正中線よりは左に偏つてゐる。「噴門」によつて食道と境し、「幽門」によつて十二指腸に連なつてゐる。

二 形状

「レトルト」狀又は囊狀

三 構造

- (一) 漿液膜、腹膜の續きで最外部にある。
- (二) 筋層、中央にあり、滑平筋で、外方より見ると、縦環斜の三層から成つてゐる。
- (三) 粘膜、内部にあり、胃腺を藏し、之によりて胃液を分泌してゐる。

〔各部の名稱〕

- (イ)噴門、食道と胃との境界
- (ロ)幽門、胃と十二指腸との境界
- (ハ)胃體、噴門部と幽門部との中間
- (ニ)大彎、胃の下縁
- (ホ)小彎、胃の上縁
- (ヘ)胃底、胃體の上縁にして盲囊状をなせる所

四胃液

- (一)胃液は胃の粘膜中にある「胃腺」から分泌される液である。
- (二)胃液は「鹽酸」と「胃蛋白酶」と云ふものから出来てゐる。

五胃の作用

- (一)胃の蠕動によつて、胃液は食物とまじつて、ドロ／＼した「食糜」と言ふもの

になる。

- (二)胃液によつて「蛋白質」は「ペプトン」となる。

第三節 腸

一位置

腸は腹腔内にあり、胃の下方から始まり、肛門に到るまで、長さ三丈餘の管状のものである。

二、形 状

管状で長さ三丈餘(身長の六倍)、小腸は細く大腸は太い。

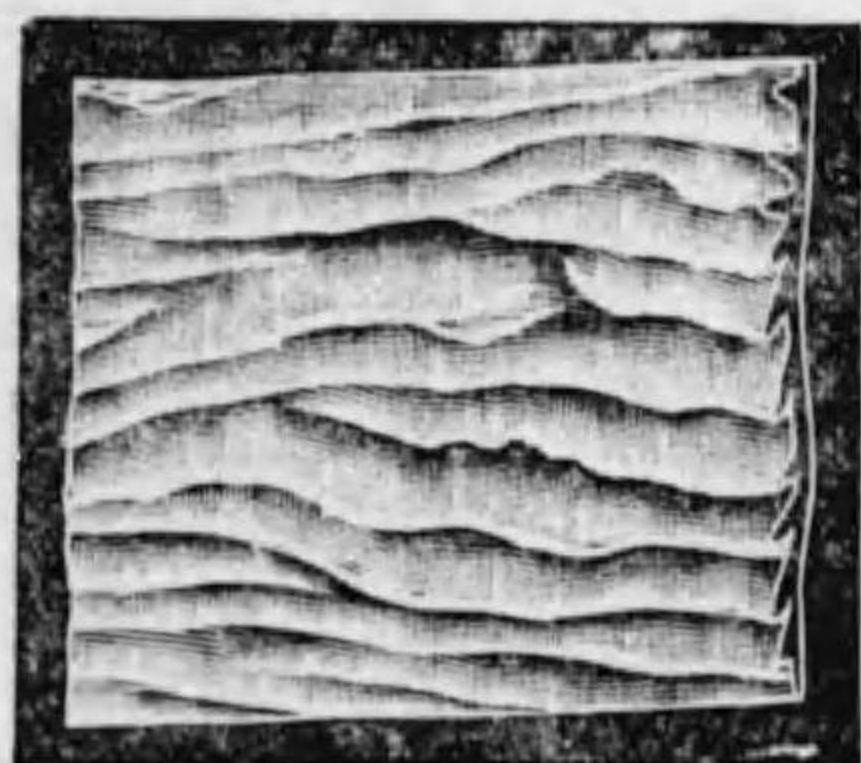
三、構 造

(一)漿液膜

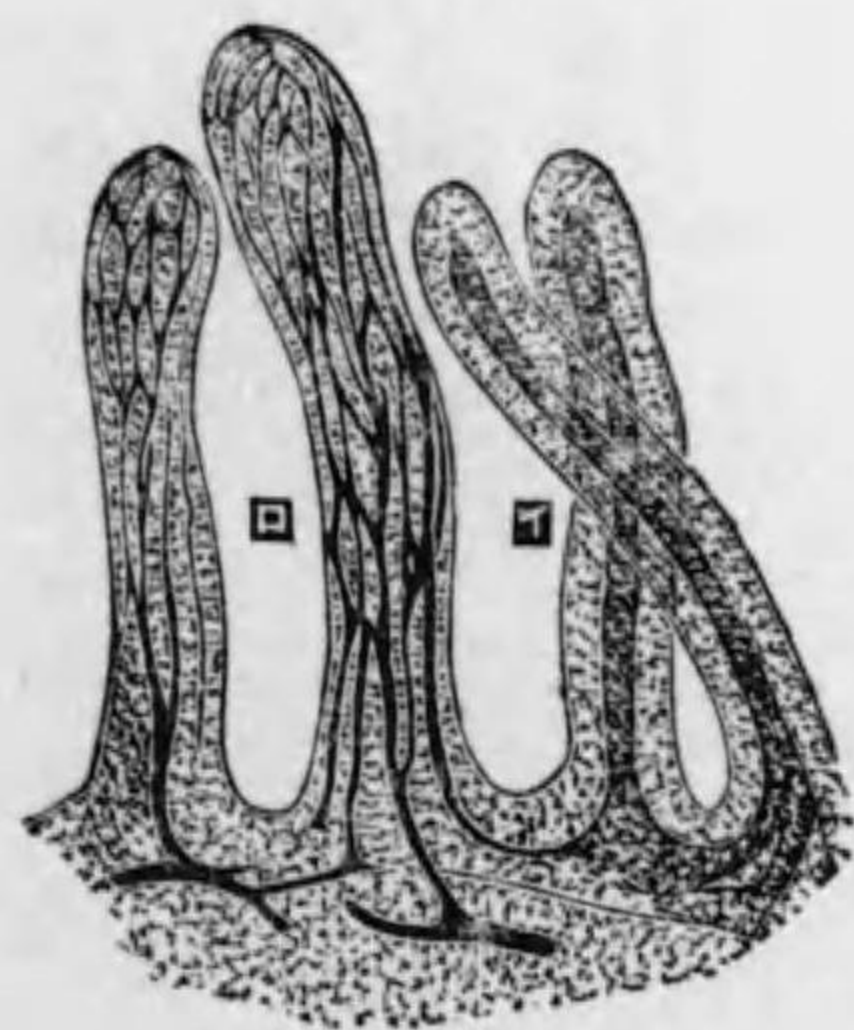
腹膜の續きで、最外部にある。

(二)筋層

滑平筋で、外縦層と内環状層との二層から成つてゐる。



膜粘ノ部上腸小 (裝載状輪)



毛絨ノ膜粘腸小

イ 乳糜管
ロ 血管

大腸にあつては外縦層が三ヶ所に集り、結腸紐を作つてゐる。

(三)粘膜

内面にあり。

(イ)絨毛、小腸にありては絨毛が突出してゐて、「タオル」のやうである。(此絨

毛には毛細血管及乳糜管がある。)

(ロ)腸腺、腸全部の粘膜にあつて腸液を分泌してゐる。

(ハ)輸胆管開口部、十二指腸の下部には輸胆管の開口部(臍管と合して)がある

(ニ)廻盲瓣、廻腸と盲腸との境にある。

(ホ)括約筋、肛門にある。

四、小腸の作用

(一)消化

(イ)胆汁によつて、「脂肪」は「乳糜」となり。

(ロ)臍液によつて「含水炭素」は「葡萄糖」となり。

(ハ)腸液は「脂肪」「含水炭素」「蛋白質」の消化を助ける。

(イ)「百弗頓」と「葡萄糖」とは血管から。

(ロ)「乳糜」は乳糜管から。

(ハ)「水」と「鹽類」とは、血管と乳糜管とから吸収せられる。

五大腸の作用

(一)「吸収」 水分を吸収す。

(二)「排泄」 食物の残渣と消化液の殘餘とを「糞便」として排泄す。

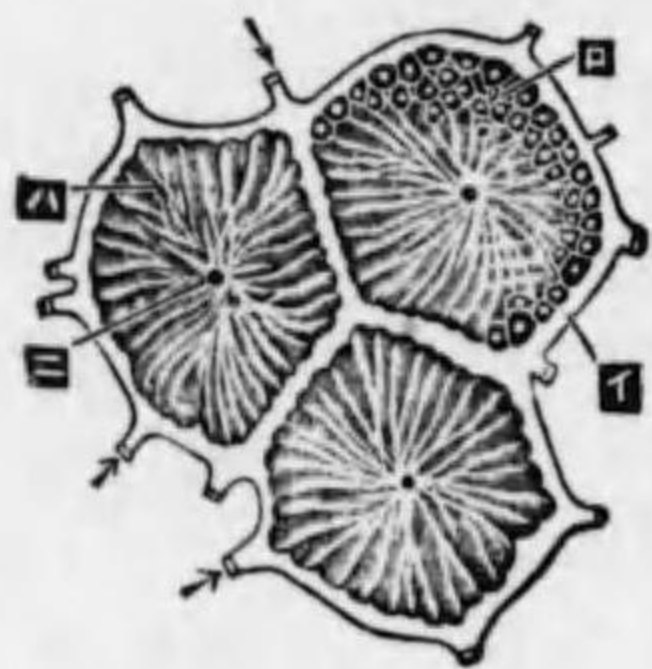
第四節 肝臓

一、位置

腹腔内に於て、横隔膜の直下にあり、正中線よりは右に偏してゐる。形は大凡三角形である。

二、構造

肝臓ノ構造



上ハ肝小葉
イ 葉間静脈
ロ 肝細胞
ハ 毛細管網
ニ 葉中静脈

下ハ膽道
イ 肝細胞
ロ 微絲胆道
ハ 微絲血管

(一)「固有膜」 外面を包んでゐる。

(二) 血管

肝實質に入り、葉間静脈となり、肝小葉の境をなしてゐる。葉間静脈は更に毛細管網となり、葉中静脈となつてゐる。

肝動脈

門静脈に沿ふて肝實質に入り、肝細胞を榮養してゐる。

(三) 小葉

肝細胞と毛細管網とから成つてゐる。(肝細胞に於て胆汁を分泌す)胆汁は微糸胆道から葉間胆道を経て胆管に集り胆嚢に入るのである。

三 肝臓の作用

- (一) 胆汁を分泌す。
- (二) 葡萄糖の多きに過ぐるときは、貯へておいて必要なるとき、血液中に送り出す。
- (三) 人體に害あるものを中和する働きをなす。

胆 嚢

- (イ) 肝臓の直下にありて、肝臓から分泌せられたる胆汁を貯ておくのである。
- (ロ) 食物が十二指腸を通るとき、胆汁を輸胆管を経て十二指腸に送り出すのである。

第五節 脾 臓

一 位 置

腹腔内にあつて胃の後方に附いてある、牛の舌のやうな形をしてゐる。

二 作用

胆汁を分泌する。

第六節 消化器の養生法

一 口腔は常に清潔にしておくこと。

毎朝起きたるときは勿論、食後と就眠前に歯を磨くこと、それから又時々含

嗽をなすこと。

二 手指を口に入れぬやう心懸けること。

三 食事については左の心得を守ること。

(イ) 時間及分量を定むること(間食を廢すること)。

(ロ) 不消化物は避くること。

(ハ) 生水を飲まぬやう、生物を食べぬこと。

(ニ) 酒類は飲まぬこと。

第七章 呼吸器

第一 名稱

- (イ) 鼻腔、
- (ロ) 喉頭、
- (ハ) 氣管及氣管枝、
- (ニ) 肺臟

第二 位置及形狀

- 一、〔鼻〕。顔面の中央にあつて、大凡三角形
- 二、〔喉頭〕。前頸部にあつて、食道の前に位し漏斗状
- 三、〔氣管〕。喉頭の下方で、前頸部にあり管状
- 四、〔氣管枝〕。氣管のつづきで、樹枝状に分れて肺臟に入る
- 五、〔肺臟〕。胸腔内にあつて、心臟の兩側にある、形は圓錐形

第三 喉頭

一 構造

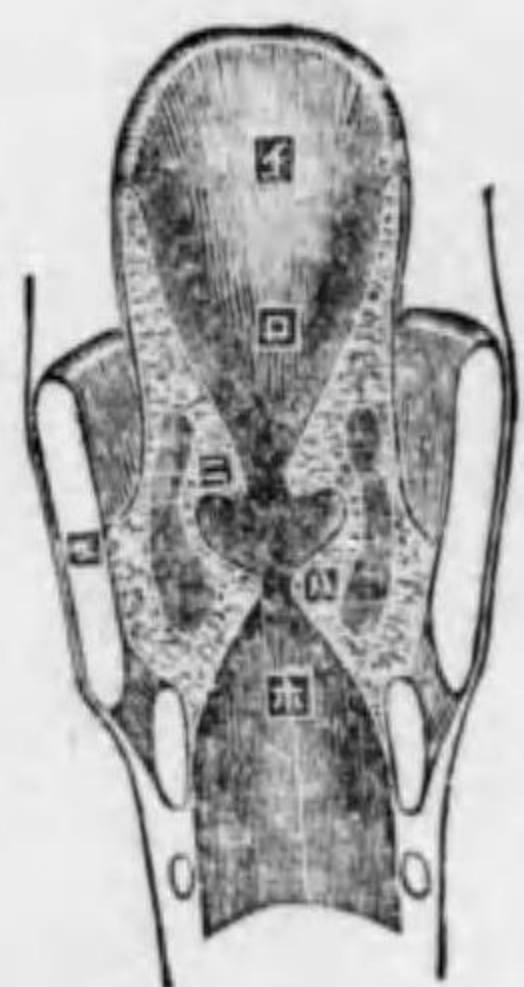
七個の軟骨(甲状、披裂、環状、小角、會厭、楔状、種子状)と之に附着せる靱帯、筋及粘膜から成つてゐる。

二 聲帶

喉頭腔内に、上下二對の筋肉の皺襞がある、上を假聲帶、下を眞聲帶と云つて、左右眞聲帶の間にある、間隙を聲門裂と稱へてゐる、此聲門は皺襞の伸縮によつて開閉するやうになつてゐる。

三 聲音の發生

音聲は、呼氣が聲門を通過する際に聲帶の振動する爲に生ずるのである。此際筋肉の働によつて聲帶の幅、長さ、緊張度等に變化を生じ、之れに依つて聲音の大小高低等の區別を生ずるものである。



イ 會厭軟骨
ロ 會厭結節
ハ 眞聲帶
ニ 假聲帶
ホ 下喉頭腔
ヘ 甲状軟骨

四言語の構成

聲帯に於て生じたる音聲は、口腔・舌・齒牙・口唇等の働に因て種々に變化し、之を綴つて言語を構成するのである。

第四 肺 臟

一 肺臟の被膜及葉

肺臟は肺肋膜に依て被はれ、葉間截痕によりて、右は三葉、左は二葉に分れる。

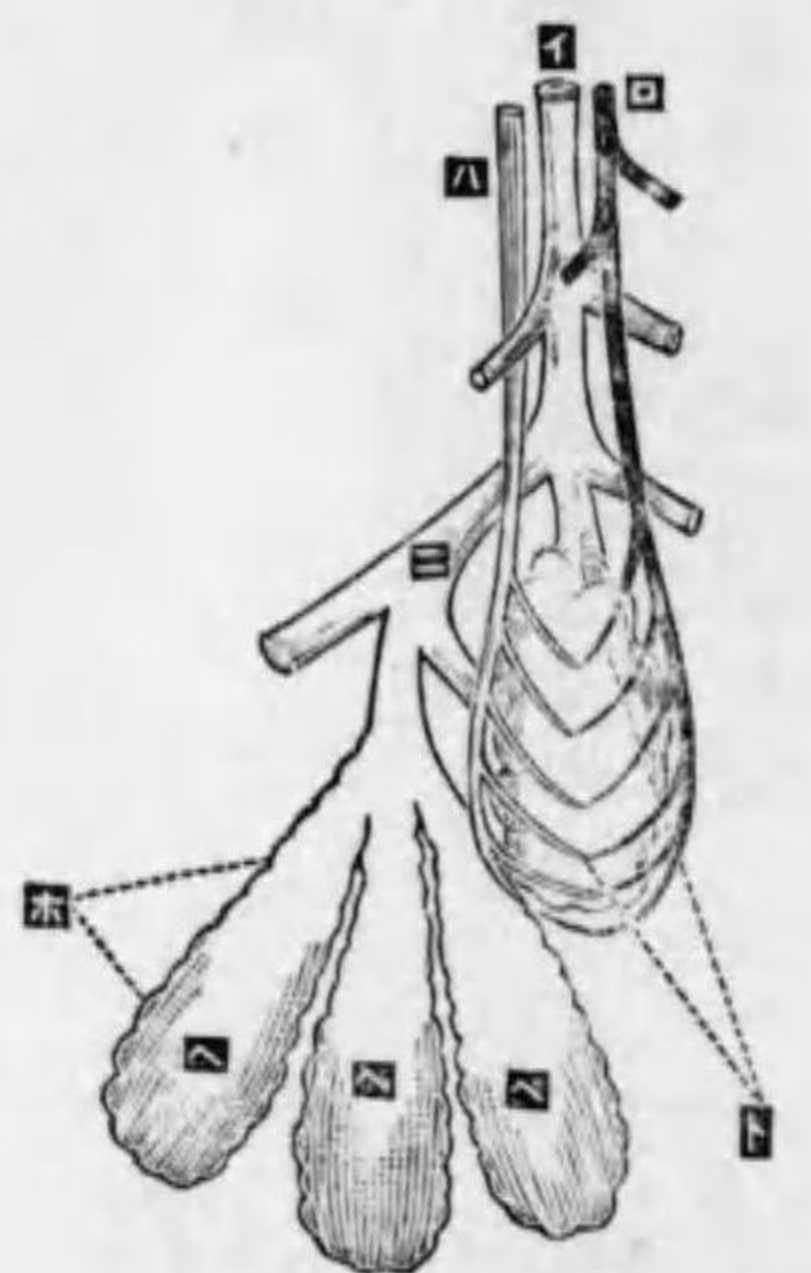
〔名稱〕

- (イ) 基底、横隔膜に接する所
- (ロ) 尖端、鈍圓で、胸廓の上の方にある。(肺尖)
- (ハ) 肺門、内面にありて陥凹し、血管及氣管枝の出入する所である。

二 構造

海綿狀で弾力がある、小氣管枝、血管及結締織から成つてゐる

〔造構の葉小肺〕



- イ 氣管枝
 - ロ 肺動脈小枝
 - ハ 肺靜脈小枝
 - ニ 毛細氣管枝
 - ホ 肺胞
 - ヘ 漏斗
 - ト 毛細管網
- (1) 〔毛細氣管枝〕氣管枝の續きで樹枝の如く分れ、遂に盲囊となる、之を「漏斗」と云ひ、壁は數多の小胞で、之を「肺胞」と云つてゐる。

(2) 〔血管〕

- (イ) 肺動脈、心臟から靜脈血を輸入し來るものであつて、毛細氣管枝に沿ひ、漸次分れて血管網となり、肺胞を纏絡してゐる。
- (ロ) 肺靜脈、血管網から發して、小氣管枝に沿ひ、心臟に動脈血を輸送してゐる。

(3)〔結締織〕

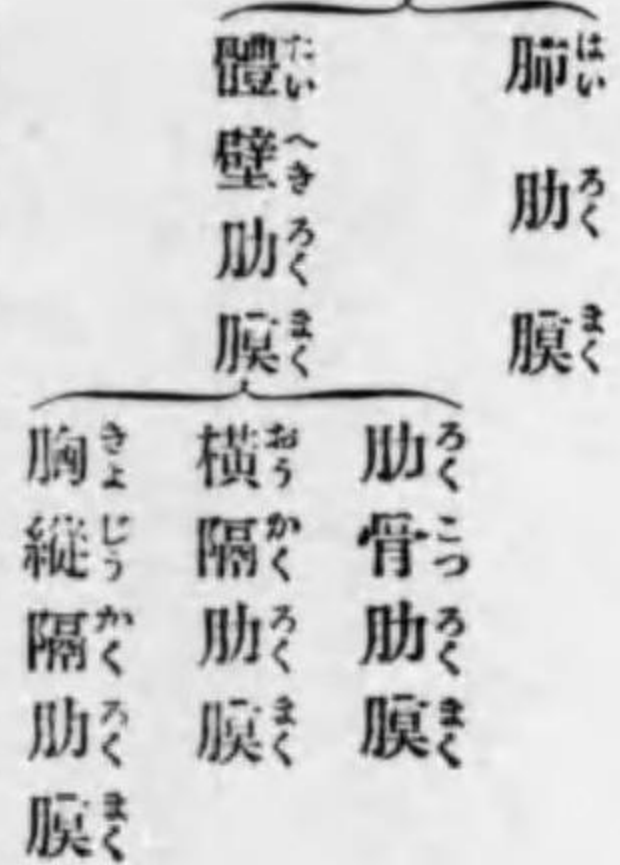
大に弾力纖維を有し、肺小葉及血管を互に連絡せしむるものである。

第五 肋 膜(胸 膜)

一 所在

肺の表面と胸廓の内面とを被ふ漿液膜である。

二 區 分



三 胸 縱 隔 腔

胸縱隔腔とは左右の胸縱隔肋膜の間にある腔隙を云ふので、之を前後に分つ

前胸縱隔腔には心臓・心嚢・大血管・胸腺があり、後胸縱隔腔には氣管・食道を入つてゐる。

四 肋 膜 竇

肺肋膜と體壁肋膜との間を肋膜竇と云ふ、少量の液がありて、兩肋膜の摩擦を防ぎつゝある。

第六 呼吸器の作用

一 (呼吸道) (鼻、喉頭、氣管及氣管枝)

- (イ) 空氣を呼吸する通路なり、
- (ロ) 喉頭にある「聲帯」は、呼氣によつて聲を出す働きをしてゐる

二 (肺 臟)

血管との間に瓦斯交換をする 〓 瓦斯交換とは血液に酸素を與へ、血液中の炭

酸を受取ることである。此結果血液は清淨となる、故に肺臓は血液の洗濯所とも云ひ得られる。

第七 呼吸の目的

一〔吸氣〕空氣を吸ふて、其の内の「酸素」を血液に與へ

二〔呼氣〕血液中の「炭酸」、「水蒸氣」等を空氣と共に外界に呼出すること〔此他に發聲作用あり〕

三〔呼吸の爲に〕

(イ) 肺臓内に於て瓦斯交換をなすこと

(ロ) 體内の水分を排泄すること

(ハ) 體温を發散すること

第八 呼氣と吸氣の區別

(4)	(3)	(2)	(1)				
温	水	炭	酸				
		蒸					
度	氣	酸	素	呼		吸	
					高		
					多		
					多		
					少		
					し		
					し		
					し		
					し		
						低	
						少	
						少	
						多	
						し	
						し	
						し	
						し	
							氣
							氣

第九 呼吸器の養生法

- (一) 常に鼻呼吸をすること
- (二) 時々深呼吸をなすこと
- (三) 姿勢を正し、胸を壓せざるやうすること
- (四) 食後及外出先より歸宅したるときは「含嗽」をなすこと
- (五) 感冒豫防の爲、冷水摩擦を行ふこと

第八章 血行器

〔名稱〕

- (イ) 心臓
- (ロ) 動脈
- (ハ) 毛細管
- (ニ) 静脈

第一節 心臓

一、位置

胸腔内に於て、左右兩肺の間にあり、正中線よりも左に偏してゐる

二、形状

形は「ハート」形。大きさは手拳大

三、構造

- (イ) 心臓は横紋筋から出来てゐて、丈夫である
- (ロ) 心嚢で包まれて居り、内部は四つの室(右房、左房、右室、左室)に分れてゐる

(ハ) 〔房室と血管との關係〕

- 右房へは大静脈が入つてゐる
- 左房へは肺静脈が入つてゐる
- 右室からは肺動脈が出る
- 左室からは大動脈が出る

(ニ) 〔瓣膜〕

瓣膜は血液の逆に流れることを防ぐもので

「二尖瓣」(僧帽瓣)は左房と左室との間

「三尖瓣」は右房と、右室との間

「半月瓣」は右室から肺動脈へ出る所と、左室から大動脈に出る所とにある

四、心臓の作用

血液循環の源である

第二節 血管の構造

管状で樹枝の如く分岐するけれども亦再び集合する

一、動脈

丈夫で弾力がある

- 外膜 弾力繊維及結締織から成つてゐる
- 中膜 滑平筋の輪状をなしてゐるもの
- 内膜 内皮細胞から成つてゐる

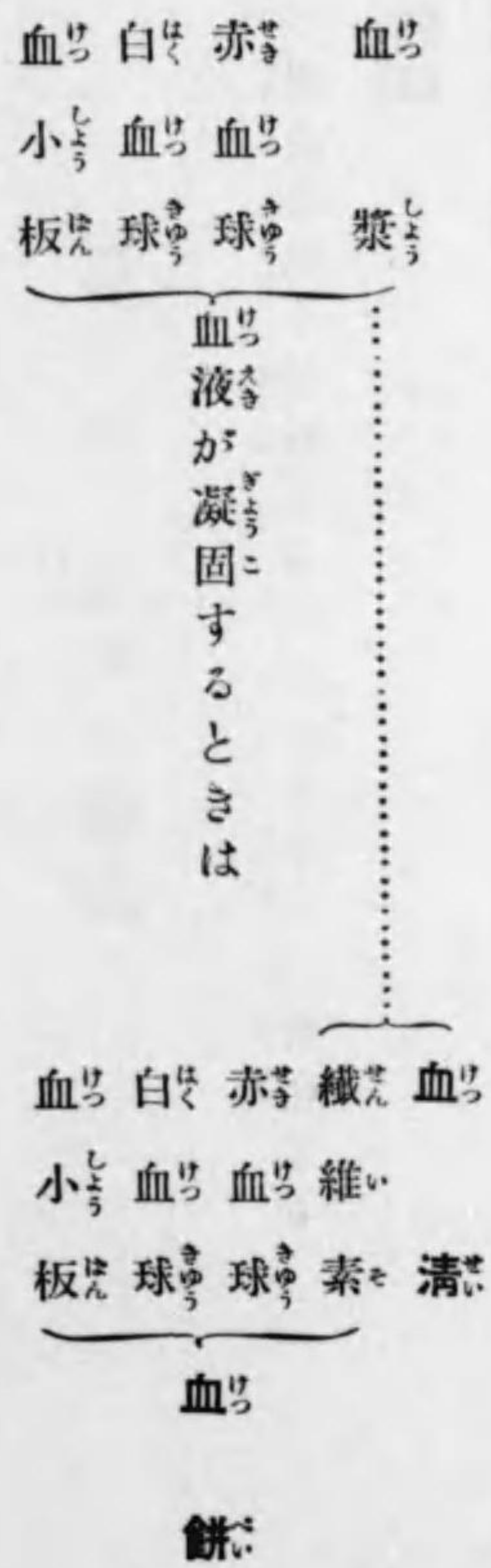
二、静脈

動脈と同じであるけれども中膜は薄くして弱し、又下肢の静脈には「静脈瓣」を有つてゐる

三、毛細管

第三節 血液

一、血液の成分



(イ)〔赤血球〕

血液の重要成分で其形皿の如く、大きさは直径一寸の三千六百分の一である。血液の赤く見ゆるは此赤血球のある爲であつて、中に「血色素」があり、これは酸素を運搬する働をする。

一立方耗の血液中に男子五百萬個、女子は四百五十萬個を有つてゐる。この赤血球は骨髓の中で造られる(胎生時には肝、脾に於ても造られる)。

(ロ)〔白血球〕

無色で核があり、形は赤血球よりも大。一立方耗の血液中に七八千個である。

脾臓、骨髓、淋巴腺等に於て造られる。身體中の塵埃、細菌等を攝取するが爲に喰細胞の名あり、又此働をする爲に種々に形狀を變じて毛細管壁を通過するから游走細胞とも云つてゐる。

(二)〔血小板〕

赤血球よりも小さく、数も少い

二、血液の量

体重の十三分の一に相当する(二升三四合)

三、血液の作用

- (1) 養分(腸から)と酸素(肺臓から)を運搬して組織へ送り
- (2) 組織から老廃物と炭酸を受取つて、肺臓、腎臓、皮膚から排出せしむるの働きをなしてゐる

四、動脈血と静脈血との相異

二色	鮮紅	暗赤
養分	多し	少し
酸素	多し	少し
老廃物	少し	多し

二色	鮮紅	暗赤
養分	多し	少し
酸素	多し	少し
老廃物	少し	多し

第四節 血液循環

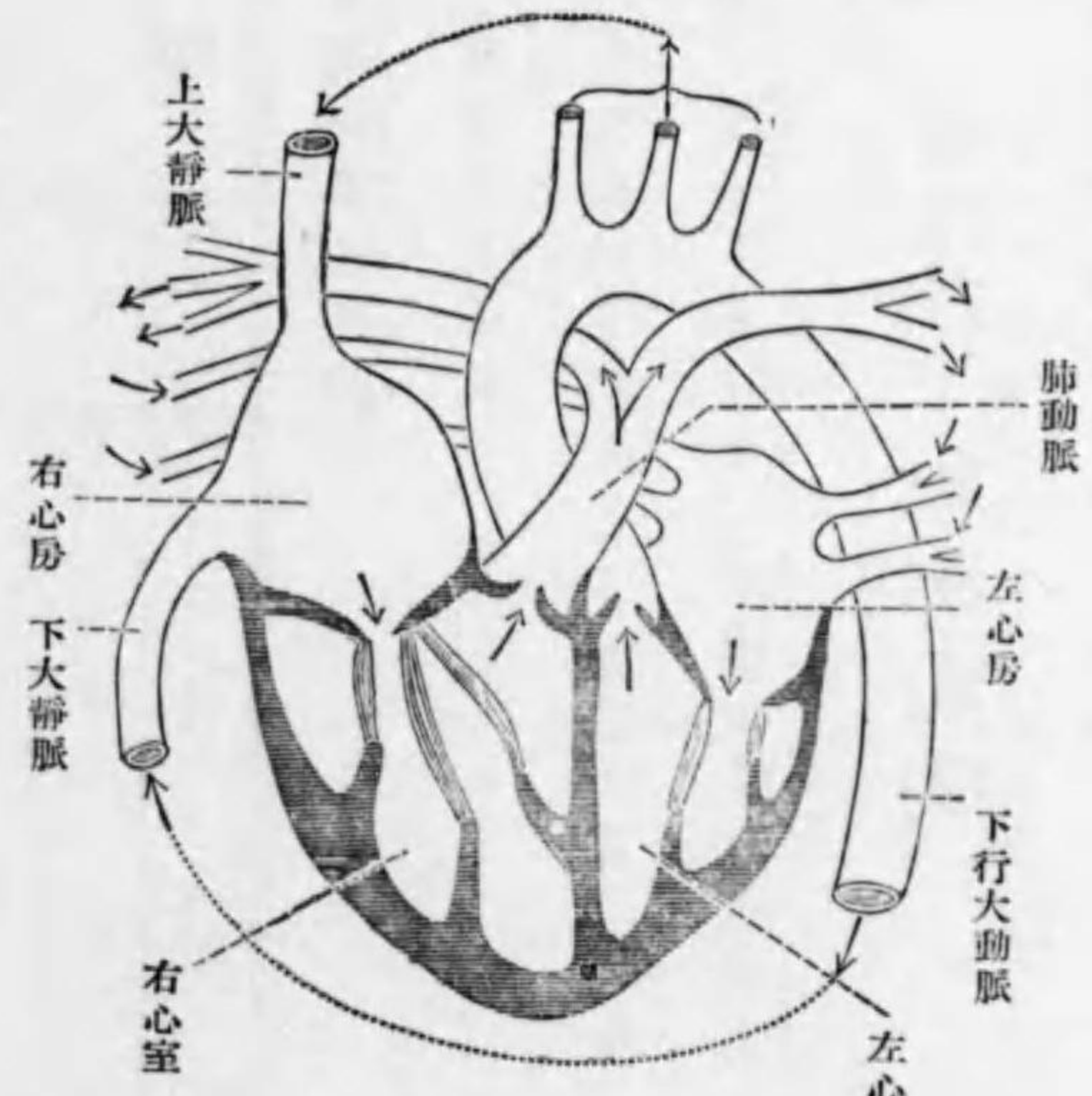
一〔大循環〕

血液が心臓の左室を出て大動脈に入り、毛細管を通つて静脈管を經、大静脈となつて心臓の右房に歸ることを云ふ

二、小循環

血液が心臓の右室を出て肺動脈に入り、肺臓の毛細管を経て、肺静脈を通り心臓の左房に歸ることを云ふ

〔係關ノト管血ト臟心〕



- (1) 右半部 (右房、右室) 静脈血
左半部 (左房、左室) 動脈血
- (2) 房へハ静脈 右房へハ大静脈ガ入ル
左房へハ肺静脈ガ入ル
- (3) 室ヨリハ動脈 右室ヨリハ肺動脈ガ出ヅ
左室ヨリハ大動脈ガ出ヅ
- (4) 大循環ハ 動脈管ニ動脈血ヲ入ル
静脈管ニ静脈血ヲ入ル
- (5) 小循環ハ 動脈管ニ静脈血ヲ入ル
静脈管ニ動脈血ヲ入ル

第五節 心動及脈搏

- 一、心動 (動悸)とは、心室が収縮する度毎に心尖が胸廓の裏に衝突する爲に起るのである
- 二、脈搏とは心臓の収縮によりて、血液が動脈管の内に押し出され、其波動が動脈の末梢に及ぶ爲に動脈が擴張せられて起るのである
- 三、心動及脈搏數
普通健康なる人は、一分間に七十乃至八十である

第六節 瓦斯交換

一 外呼吸

(1) 肺呼吸 肺臓に於て行はれる、空氣中の酸素を血中に入れ、血中の炭酸を肺臓内の空氣中に呼出すること、其結果血液は清淨となる

(2) 皮膚呼吸 皮膚に於ても、微量ながらも肺呼吸と等しき作用をしてゐる

二 内呼吸(組織呼吸)

動脈血中の酸素を組織に與へて酸化作用を行はしめ、其結果生じたる炭酸及老廢物を血中に入れる

其結果動脈血は靜脈血となる

第七節 血行器に對する養生法

一 適度の運動をなすこと、殊に發育時期にあるものは、體操、登山、水泳等により、心臟の強壯を計ること

二 次の事柄を慎むこと、殊に少しにても心臟の弱きものは一層の注意をなすこと

- (イ) 過激なる運動
- (ロ) 飲酒
- (ハ) 熱き飲料及熱浴
- (ニ) 精神亢奮
- (ホ) 以上の外脚氣、熱病等に犯されぬやう氣を付けること

第八節 淋巴系

一名稱

淋巴管(リンパ管) 淋巴液(リンパ液) 此中(ここのなか)を流る(ながる)

淋巴腺(リンパ腺)

二淋巴管

組織(そしき)の間隙(すき)や血管(けつかん)の周圍(まわり)から起り、段々(だんだん)集つて左右(さゆう)二條(ふたすぢ)の管(くだ)となつて、大靜脈(だいじやうみやく)に入る

三淋巴腺

淋巴管(リンパ管)の所々(ところどころ)にあつて、(イ)淋巴液(リンパ液)を濾(ひら)して病毒(びきん)が心臟(しんじやう)に向ふ(むか)のを防(ま)ぎ、(ロ)白血球(はくけつきゅう)を造(つく)るの役目(やくめ)をなしてゐる

四淋巴液

(1)成分(せいぶん) 主(おも)に毛細血管(もうさいけつかん)から滲(し)み出した(だ)もので、「淋巴漿(リンパ漿)と淋巴球(リンパ球)」とから出來(で)てゐる

(2)作用(さよう) (イ)組織(そしき)に榮養分(えいようぶん)を與(あた)へ、(ロ)組織(そしき)から老廢物(らうはいぶつ)を受取(うけと)つて心臟(しんじやう)に運(はこ)ぶのである

乳糜管(にゅうびくわん)

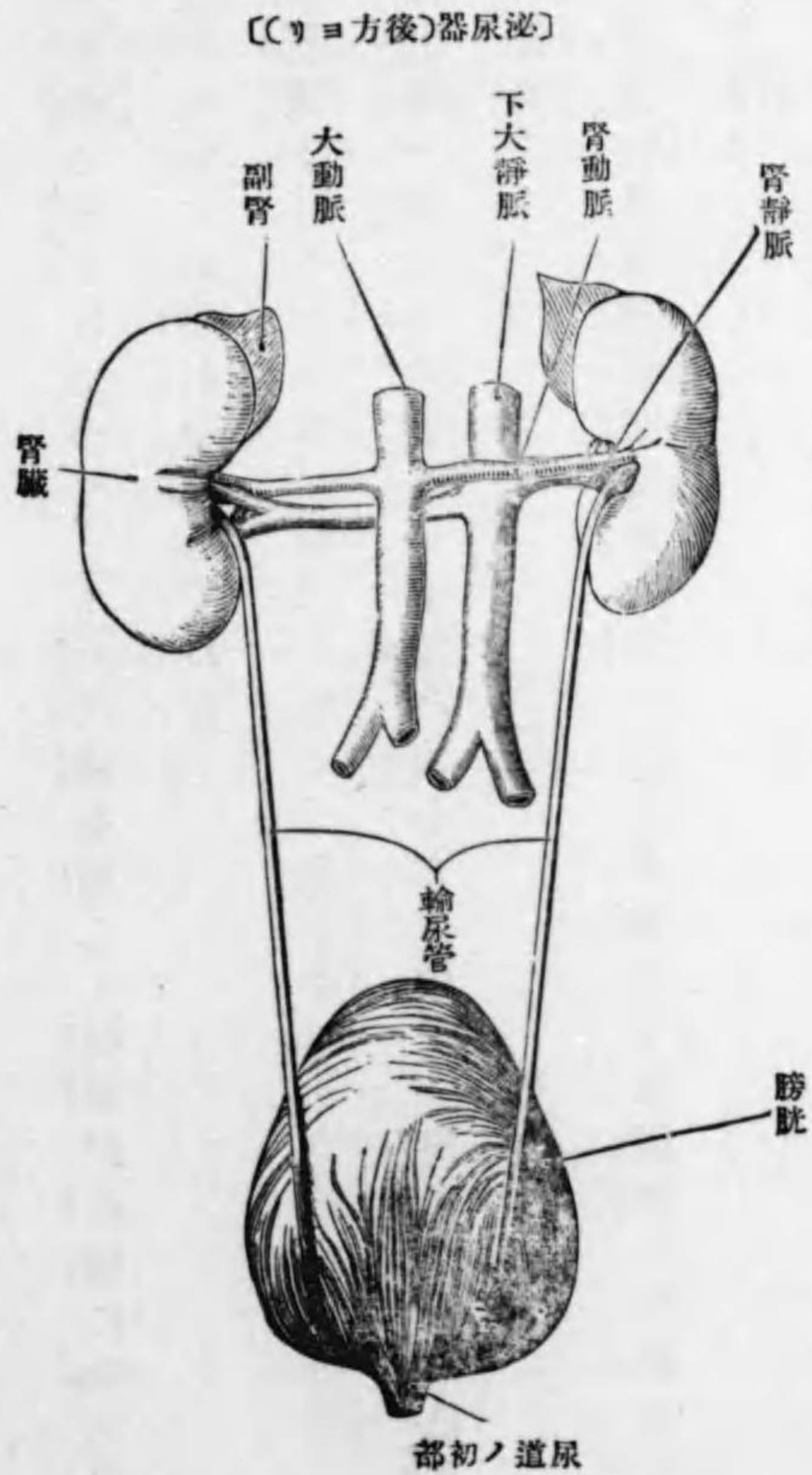
淋巴管(リンパ管)の一種(いっしゆ)に「乳糜管(にゅうびくわん)」と云(い)ふのがある、腸壁(ちやうへき)から起(おこ)つて上昇(じやうしやう)し左總淋巴幹(さそうリンパかん)に入(はい)つてゐる、即ち(すなは)ち「乳糜(にゅうび)」を運搬(うんぱん)するのである

第九章 泌尿器

第一名稱

(イ)腎臓、(ロ)輸尿管、(ハ)膀胱、(ニ)尿道。

第二位置



一腎臓

腰部に於て、腰椎の兩側に各一個宛ある。

二膀胱

小骨盤内に於て、耻骨軟骨接合の後方にある、男子は直腸の前、婦人は子宮及腔の前方である。

第三形状

腎臓は蠶豆形、膀胱は梨子状。

第四腎臓の構造

腎臓は赤褐色を呈する腺で、外面は脂肪嚢に包まれ、内縁には腎門があつて輸尿管、腎動静脈の出入する所である。

面断ノ臟腎



イ 皮質
ロ 髓質
ハ 輸尿管
ニ 血管

布分ノ管血ノ内臟腎



イ 腎動脈
ロ 腎静脈
ハ 細尿管
ニ マルピギー氏囊

解六四

一 外層(皮質)、腎小體と血管とがある。

二 内層(髓質)、腎小體から来る細尿管のある所であつて、細尿管は集合管となり、圓錐體の尖端にある乳頭の穴に開口する。

第五作用

一 腎臟

尿を分泌するのである(体内の老廢物を水や鹽類と一緒に尿として出すのである)。

二 輸尿管

腎臟で分泌せられた尿を、膀胱に送るのである。

三 膀胱

尿を溜めておく囊である。

四 尿道

膀胱にある尿を、時々外界へ排泄するの道である。

第六 尿の成分

水、鹽類、安母尼亞、
尿素、尿酸、尿酸鹽類等

第七 一日の排尿量

解六五

千瓦から千五百瓦位(五合から八合位)

第八 泌尿器の養生法

一次の事項は、腎臓炎を起し易いから慎しまねばならぬ。

(イ) 刺激性飲料(酒の如き)及刺激性食物(辛きもの、食鹽多きに過ぐるもの)を攝ること。

(ロ) 獸肉を多く食すること。

(ハ) 薬品を飲み過ぎ、皮膚粘膜に塗り過ぐること。

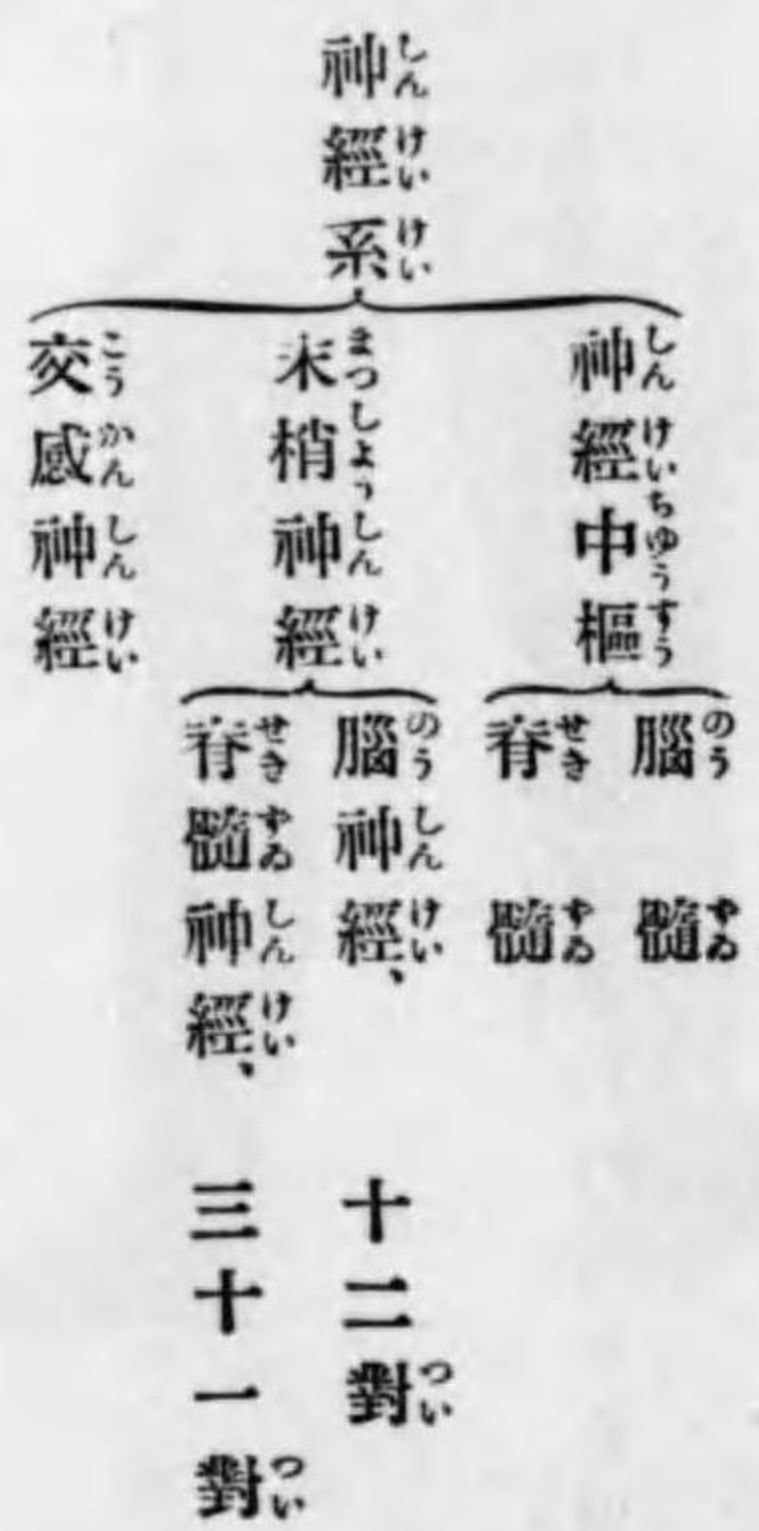
(ニ) 濕地に居住すること。

(ホ) 他の病氣殊に感冒傳染病に罹ること

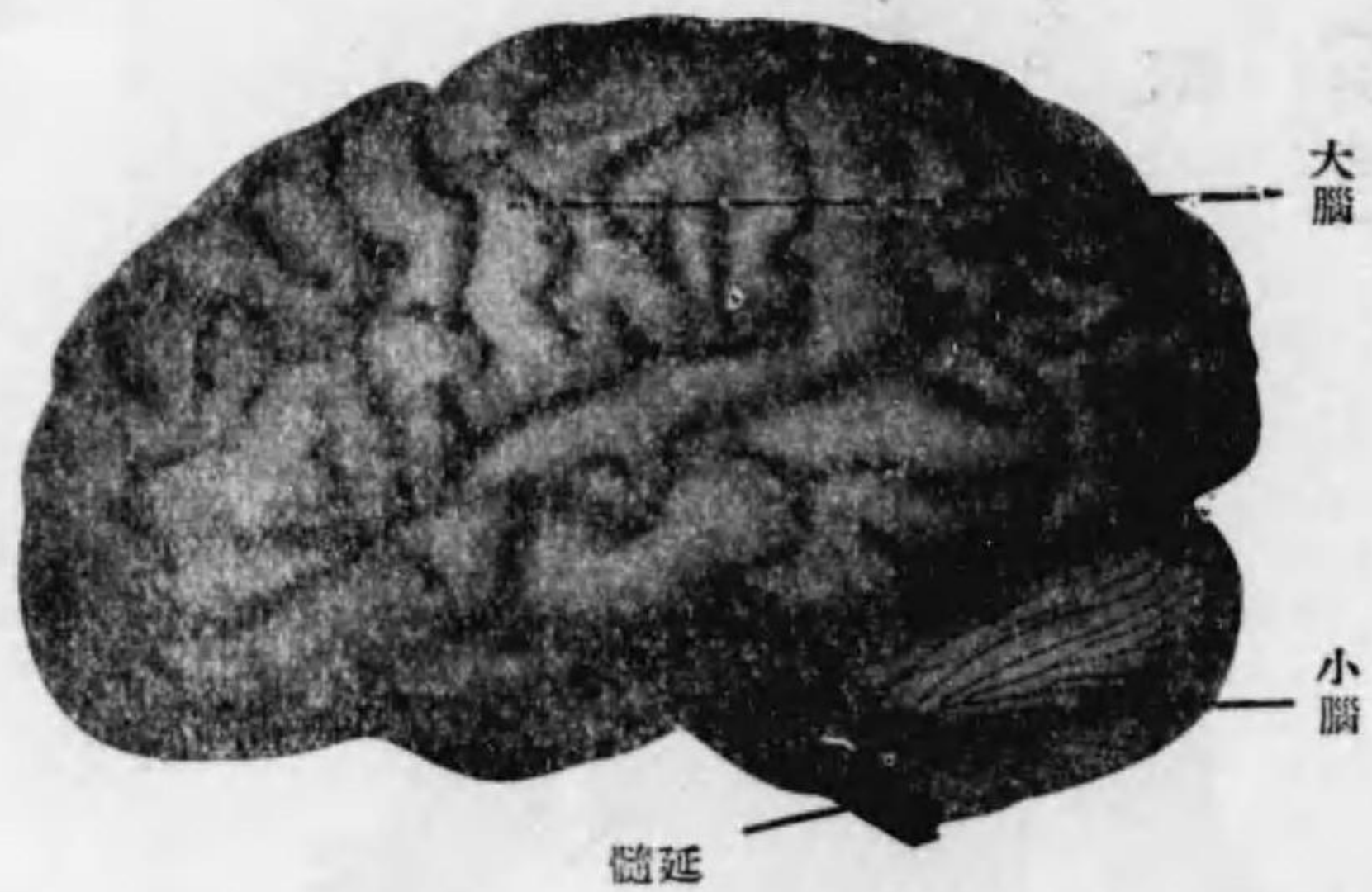
二 徵毒、淋疾に侵されぬやうすること。

第十章 神経系

第一節 神経系の區別



圖ノ髓腦



第二節 中樞

(甲) 腦髓

第一大腦

一區別

左半球、右半球に分れ、半球は前頭葉・顳葉・後頭葉・顳葉の四部から出来てゐる。

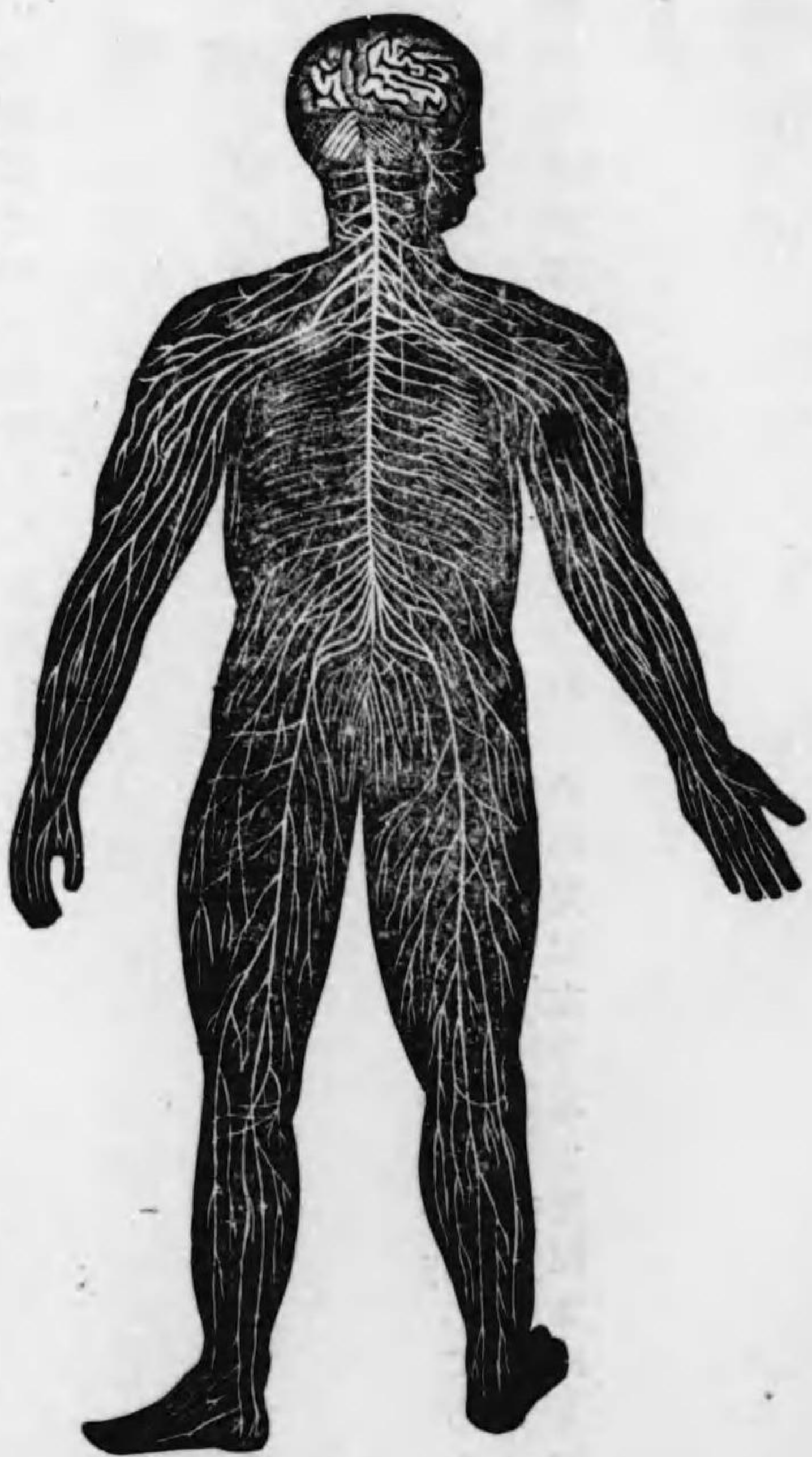
二構造

- (1) 〔外表〕 小脳や延髄と一緒に〔腦膜〕を以て包まれてゐる。
- (2) 〔廻轉〕及〔溝〕

(3) 腦質の表面は、廻轉と溝とがある。

〔腦液〕

腦 髓



ス示ヲ佈分ノ經神髓脊腦

腦質の内面には、〔腦室〕があつて、腦液を入れてゐる、此腦液は、脊髄液と續いてゐるのである。

(4) 【灰白質】と【白質】

- (イ) 灰白質(皮質)は外部にあつて、神経細胞から成つてゐるし。
- (ロ) 白質は神経繊維から出来てゐる。

三 作用

(イ) 心の働きの本元であつて、思考・判断・記憶・感覺等總て此處で行はれるのである。

(ロ) 大脳の各半球は、反対側の身體半分の神経機能を支配してゐるのである。例之左の手は右半球で支配され、右の足は左半球で支配されるが如きである。

第二 小 腦

一 位置

大脳後頭葉の下で、延髓の後方にある。

二 構造

大脳と殆ど同じである。

三 作用

身體の平均を保つのである。

第三 延 髓

一 位置

脳髓中の最下端であつて、上の方は大脳、後方は小脳、下方は脊髄である。

二 構造

- (一) 外表は大脳・小脳と一緒に脳膜に包まれてゐる。
- (二) 大脳とは反対に灰白質は内部にあつて、白質は外部になつてゐる。

三、作用

- (一) 末梢神経の繊維が通つて居るので、運動や知覚の通り道となつてゐる。
- (二) 呼吸中樞、血行中樞等がある。

四、錐體交叉

大脳や小脳から来る神経繊維は、此處に於て左右交叉してゐるのである。

(乙) 脊 髓

一、所在

脊髓は「脊髓管」の中にある。上は延髓に連り、下は馬尾狀に終つてゐる。

二、形状 「かもじ」形

三、構造

(一) 「外表」

〔脊髓膜〕で被はれてゐる(脊髓膜は、腦膜に續いて居る)

(二) 「灰白質」と「白質」

灰白質は内部にあつてH字形である。之は神経細胞と此細胞を支ふる組織から成つてゐる。

白質は外部にあつて、神経纖維から出来てゐる。

(三) 「脊髓液」

腦液と續いてゐるのである。

四、作用

- (1) 延髓と同じやうに末梢神経の通り道となつてゐる。
- (2) 分岐中樞・排尿中樞・脱糞中樞等がある。
- (3) 反射運動と云つて末梢に起つて刺激を、腦髓に傳へずして直ぐ運動を起す働をなす中樞がある。

第三節 末梢神經

一 生理的區別

(1) 〔運動神經〕

神經中樞(腦及脊髓)の命令を、末梢の筋肉に傳へ、身體の運動を起さしむるものである。

(2) 〔知覺神經〕

五官器・内臟に起つた刺激を中樞へ傳へる働きをなすのである。

二 腦神經十二對

一、嗅	神	知	知	嗅覺を司る
二、視	神	知	視覺を司る	
三、動	眼	運	眼の運動	
四、滑	車	運	同	
五、三	叉	知	顔面の知覺、咀嚼運動	
六、外	旋	運	眼の運動	
七、顔	面	運	顔面の運動	
八、聽	神	知	聽覺	
九、舌	咽	知	味覺、口蓋及咽頭の運動	
一〇、迷	走	知	呼吸、血行、消化を司る	
一一、副	神	運	肩胛部の筋の運動	
一二、舌	下	運	舌の運動	

三 脊髓神經 三十一對

- (1) 脊髓灰白質の「前根」から運動神経纖維を出し、「後根」からは知覚神経纖維が出てゐる
- (2) 前根後根の纖維は、出てから間もなく相混じて、更に「前枝」「後枝」となりて身體の各部へ分れてゐる。
- (3) 脊髓神経の纖維は、後頭部頸部から以下に分れてゐるのである。さうして運動神経纖維は筋肉血管汗腺に、知覚神経の纖維は皮膚や内臓に進んでゐるのである。

第四節 交感神経

一 所在

- (1) 【神経節】

脊髓の兩側に於て二十四個の節がある。

- (2) 【神経纖維】

節から出て、血管、腺、内臓に到つてゐる。

二 作用

- (1) 血管の收縮擴張
- (2) 汗の分泌
- (3) 脳脊髄神経と連絡して循環、消化、分泌を手傳つてゐる。

第四節 神經の養生法

- 一、精神病の系統の人は、特に注意しなければならぬ。
- 二、飲酒、微毒は精神病、神經病の原因となることが多いから氣を付けねばならぬ、就中「卒中血統」の人は殊に注意せねばならぬ。
- 三、精神過勞及亢奮を避くべきである。
- 四、便秘するのはよろしくない。

第十一章 五官器

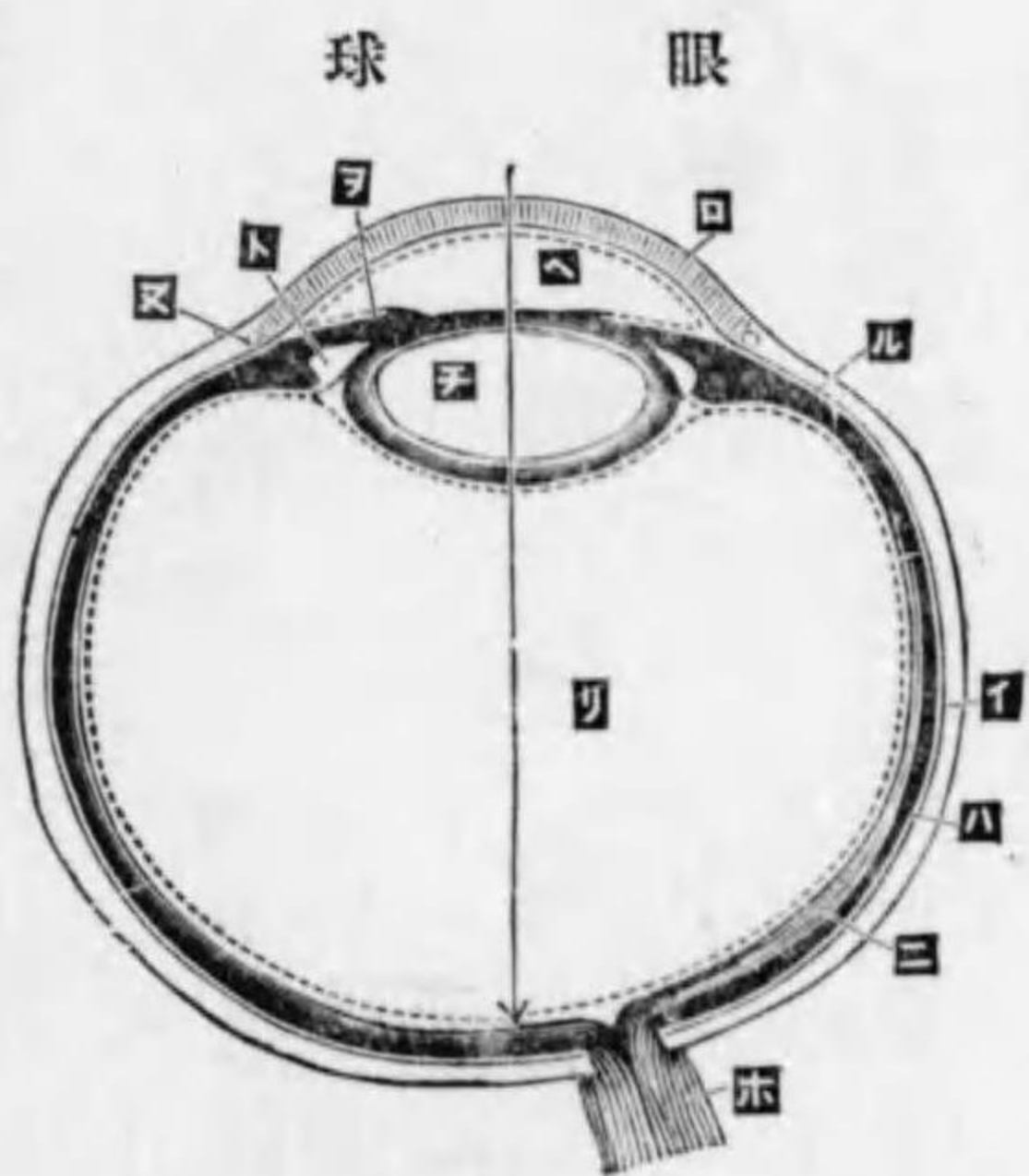
五官器とは眼・耳・鼻・舌及皮膚を云ふのである。

第一節 眼

一 構造

(イ)水晶體と硝子體と云ふ二つの「レンズ」があり。

(ロ)硝子體の後方に「網膜」があつて、此膜に物の像が寫るのである、此膜から視



イ 白膜
ロ 角膜
ハ 脈絡膜
ニ 網膜
ホ 視神經
ヘ 前眼房
ト 後眼房
チ 水晶體
リ 硝子體
ヌ シレンム氏管
ル 毛様體
ナ 虹彩

解八〇
神經が發して大脳に行つて
ゐる。

(ハ) 其外に脈絡膜があるが、此
膜の前方は虹彩となり、水
晶體の前面に孔を作つてゐ
る、之が瞳孔である。

(ニ) 最外部には前方を角膜、後

方を「白膜」と名付ける膜がある。

〔眼の附屬物〕

眉毛・睫毛・眼瞼・眼筋・涙腺。

二 作用

物の光及色を視るのである。

三 眼の養生法

- (一) 光は強きに過ぎ、弱きに過ぎてはならぬ。
- (二) 讀書をしたり、作業をするのには姿勢を正しくすること。
- (三) 時々眼を清水で洗ふこと。
- (四) 近視に罹りたる時は醫師に眼鏡の選定を依頼すること。
- (五) 眼疾は速に治療すべきである。

第二節 耳

一 構造

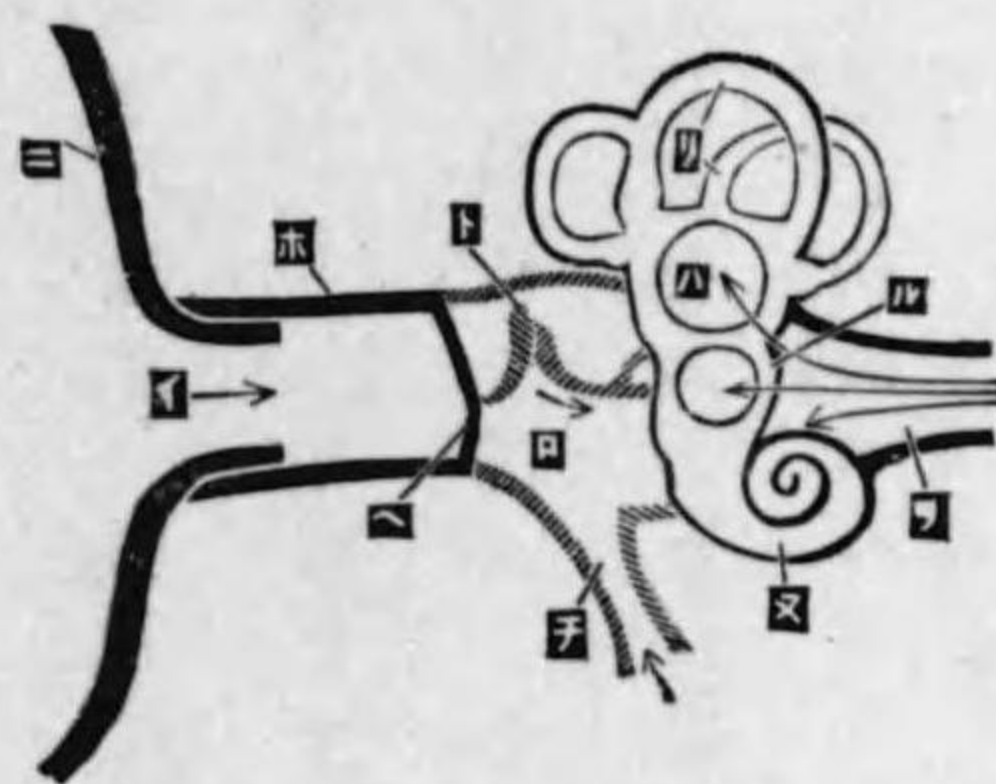
理髮傳染病學

- (一) 外耳、(耳翼・外聽道・鼓膜)
- (二) 中耳、(三つの聽骨・歐氏管・卵圓窓)
- (三) 内耳、(前庭・三半規管・蝸牛殼管)

二 作用

- (一) 聽覺を司ること。
- (二) 身體殊に頭首の位置を知ること。

〔器 聽〕



イ 外耳
ロ 中耳
ハ 内耳
ホ 外聽道
ヘ 鼓膜
ト 三聽骨
チ ヨウスタク氏管
リ 三半規管
メ 蝸牛殼管
ル 前庭
ナ 内聽道

三 耳の養生法

- (一) 外聽道を刺つてはならぬ。
- (二) 外聽道へ異物を入れてはいけない。
- (三) 便通を整へること。

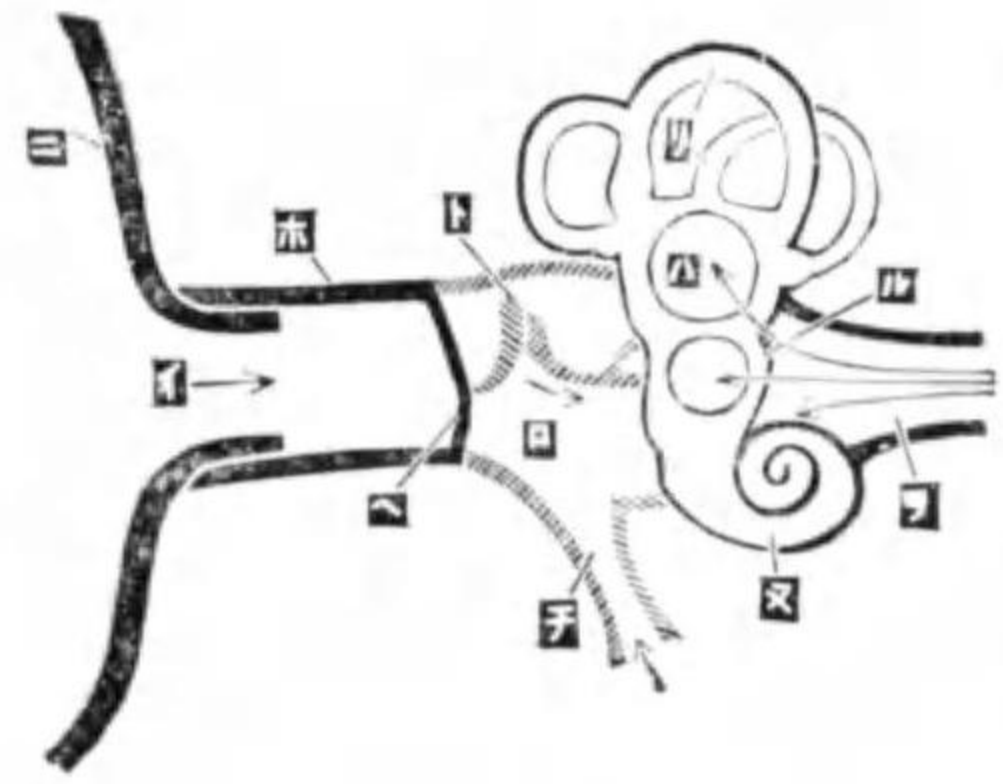
理髮傳染病學

- (一) 外耳 (耳翼・外聽道・鼓膜)
- (二) 中耳 (三つの聽骨・歐氏管・卵圓窓)
- (三) 内耳 (前庭・三半規管・蝸牛殼管)

二作 用

- (一) 聽覺を司ること。
- (二) 身體殊に頭首の位置を知ること。

〔器 聽〕



- イ 外耳
- ロ 中耳
- ハ 内耳
- ホ 外聽道
- ヘ 鼓膜
- ト 三聽骨
- チ ヨウスタグ氏管
- リ 三半規管
- リ 蝸牛殼管
- ル 前庭
- ナ 内聽道

三耳の養生法

- (一) 外聽道を剃つてはならぬ。
- (二) 外聽道へ異物を入れてはいけない。
- (三) 便通を整へること。

理髮傳染病學目次

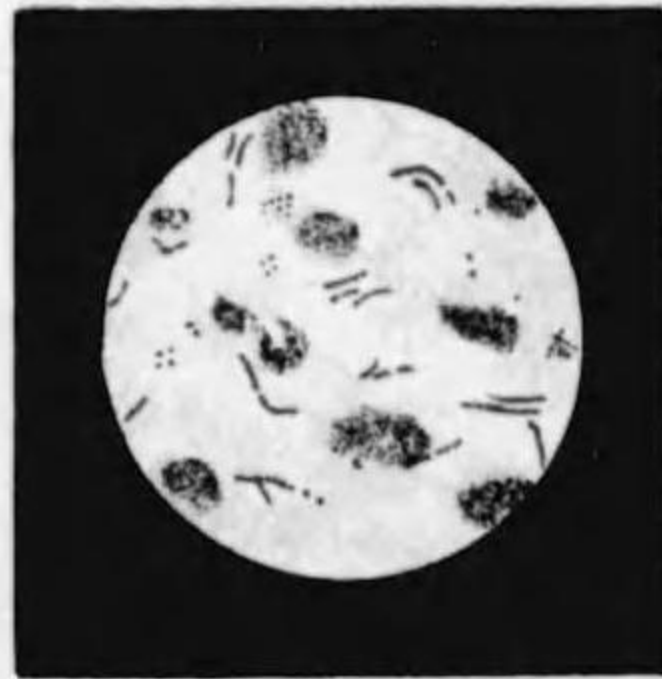
第一編 總論	論	一	第八章 皮膚結核	核	四一
第二編 各論	論	一一	第九章 黴毒	毒	四五
第一章 丹毒	毒	一一	第十章 癩病	病	五〇
第二章 皮膚化膿症	症	一六	第十一章 白癬	癬	五二
第三章 膿漏眼(淋毒性結膜)炎又は風眼	眼	二〇	第十二章 黃癬	癬	五五
第四章 傳染性結膜炎	炎	二三	第十三章 癩癧	癧	五八
第五章 傳染性膿癩疹	疹	二五	第十四章 疥癬	癬	六〇
第六章 脾脫疽	疽	三一	第十五章 頭虱(毛虱)	虱	六二
第七章 肺結核	核	三四	第十六章 「トラホーム」(顆粒性結膜炎)	炎	六四
			第十七章 圓形禿頭(鬼頭)	頭	六八
			第十八章 濕疹	疹	七一



脾脱疽菌



丹毒連鎖狀球菌



結核菌



肺炎雙球菌



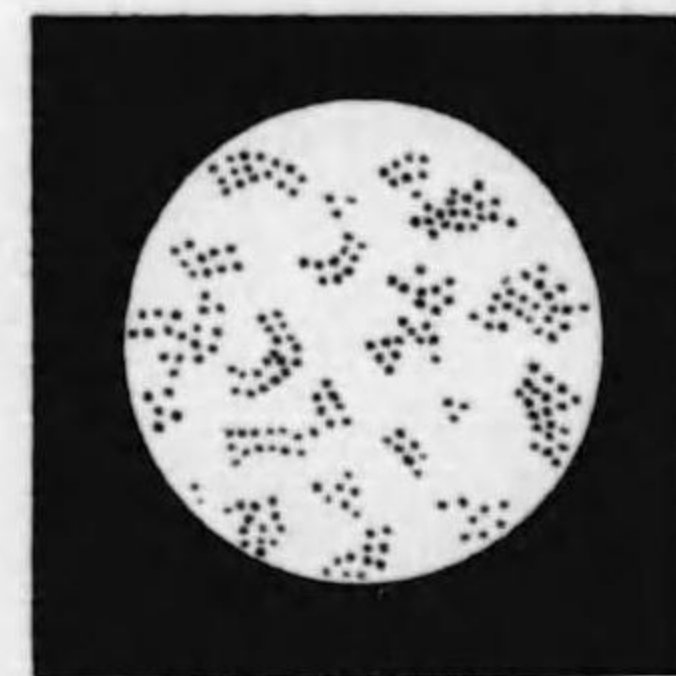
淋菌



淋菌



傷寒霍亂菌



葡萄狀球菌

傳染病圖譜に就て

本書に挿入しました傳染病圖譜中、第一、二、三、六、七、九、十圖は、東京帝國大學教授土肥慶藏博士御著述の「皮膚科學」より、第四、五、八、十一圖は岡山醫學專門學校長たりし故筒井八百珠博士遺稿「皮膚病學」「花柳病學」より複寫させて頂いたものであります。兩先生が多年苦心せられました此貴重なる圖譜を、本書に複寫させて頂きまする事に就ては、相當考慮致しましたけれども、理髮師諸君の研究向上の爲に、遂に意を決して土肥先生並に故筒井博士の御遺族に御願申上げました處、御二方共御快諾下さいました事は、私の衷心より感謝する處であります。而已ならずこれが爲に理髮業界の進歩發達の上に、妙からぬ恵を得た事を信ずるので御座います、茲に謹みて土肥先生並に筒井先生御遺族に厚く御禮を申上ぐる次第であります。

大正十三年八月

井口乘海

第一圖 白色葡萄狀菌性膿痂疹



第二圖 連鎖狀菌性膿痂疹



第三圖 尋常性狼瘡



第四圖 皮膚疣狀結核

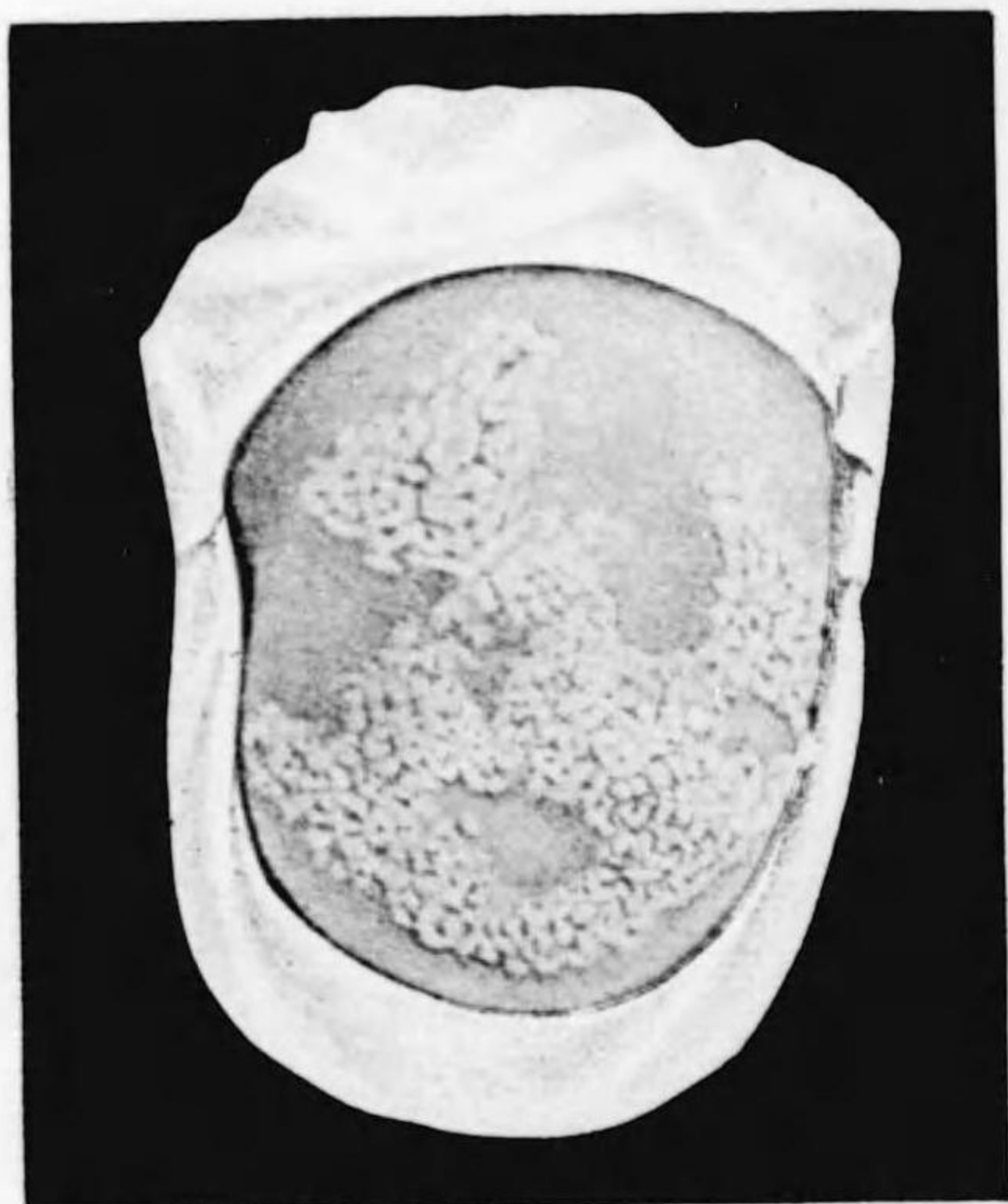


圖 五 第
贅 疣 平 扁

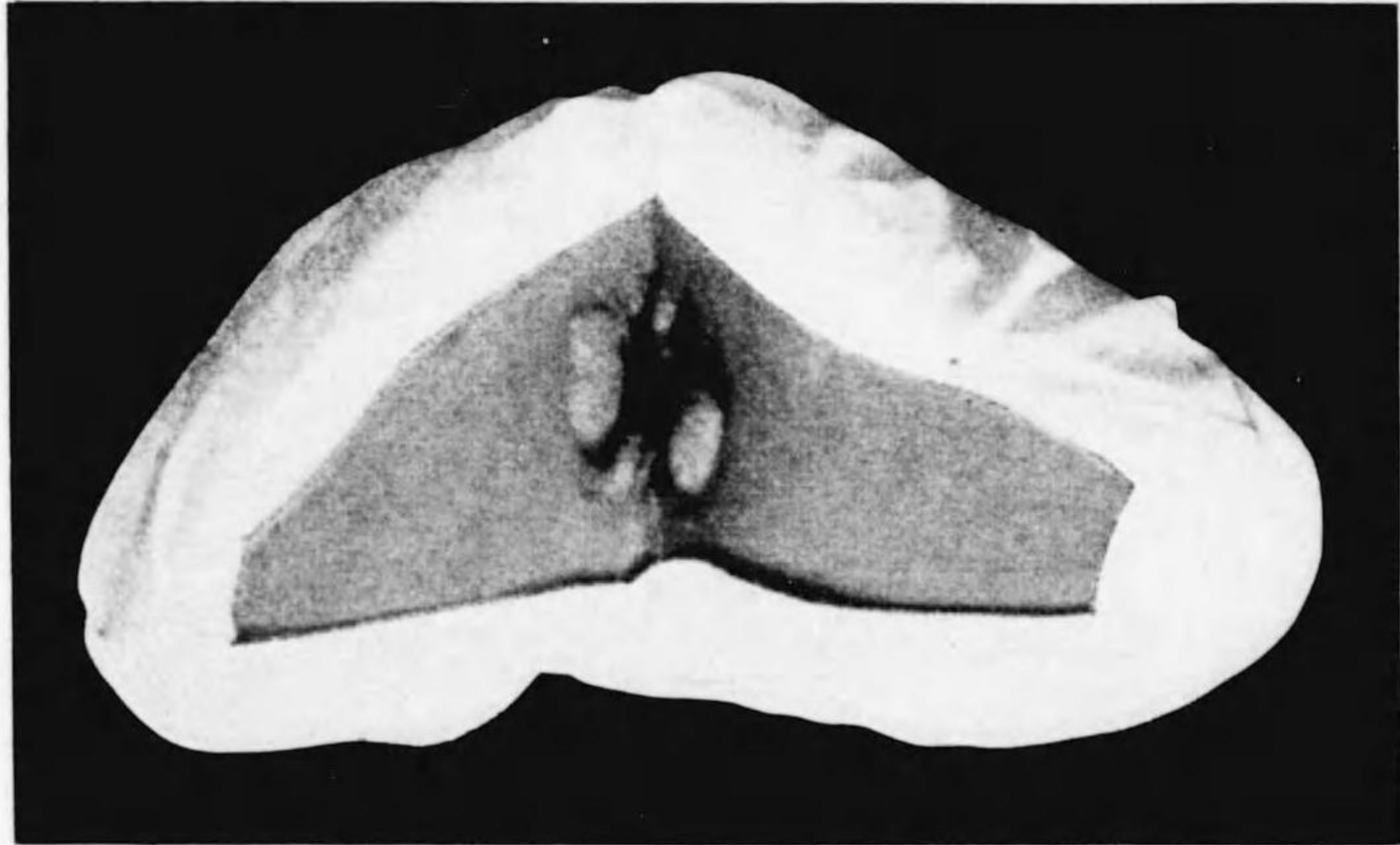


圖 七 第
腫 謨 護



圖 六 第
疳 下 性 硬

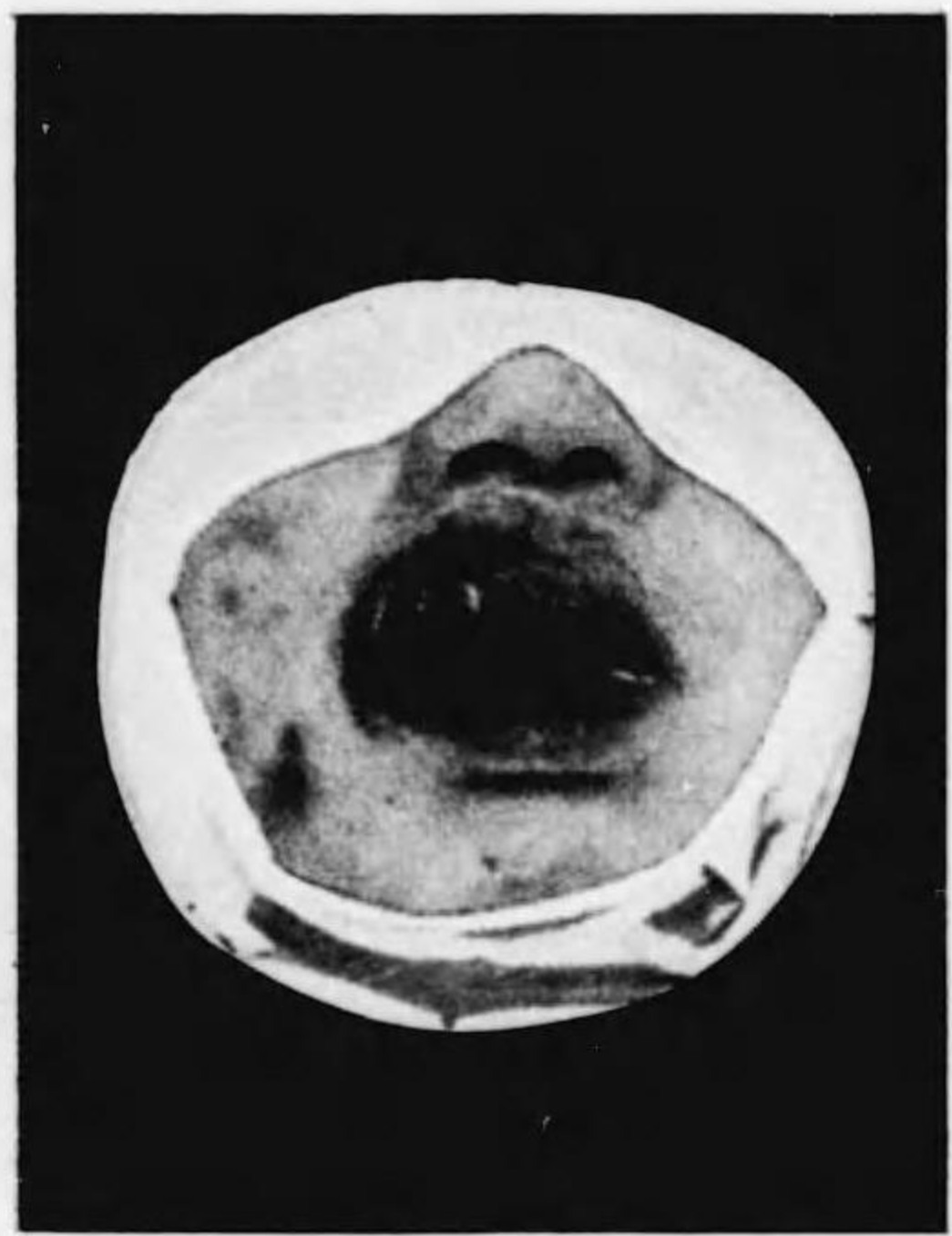
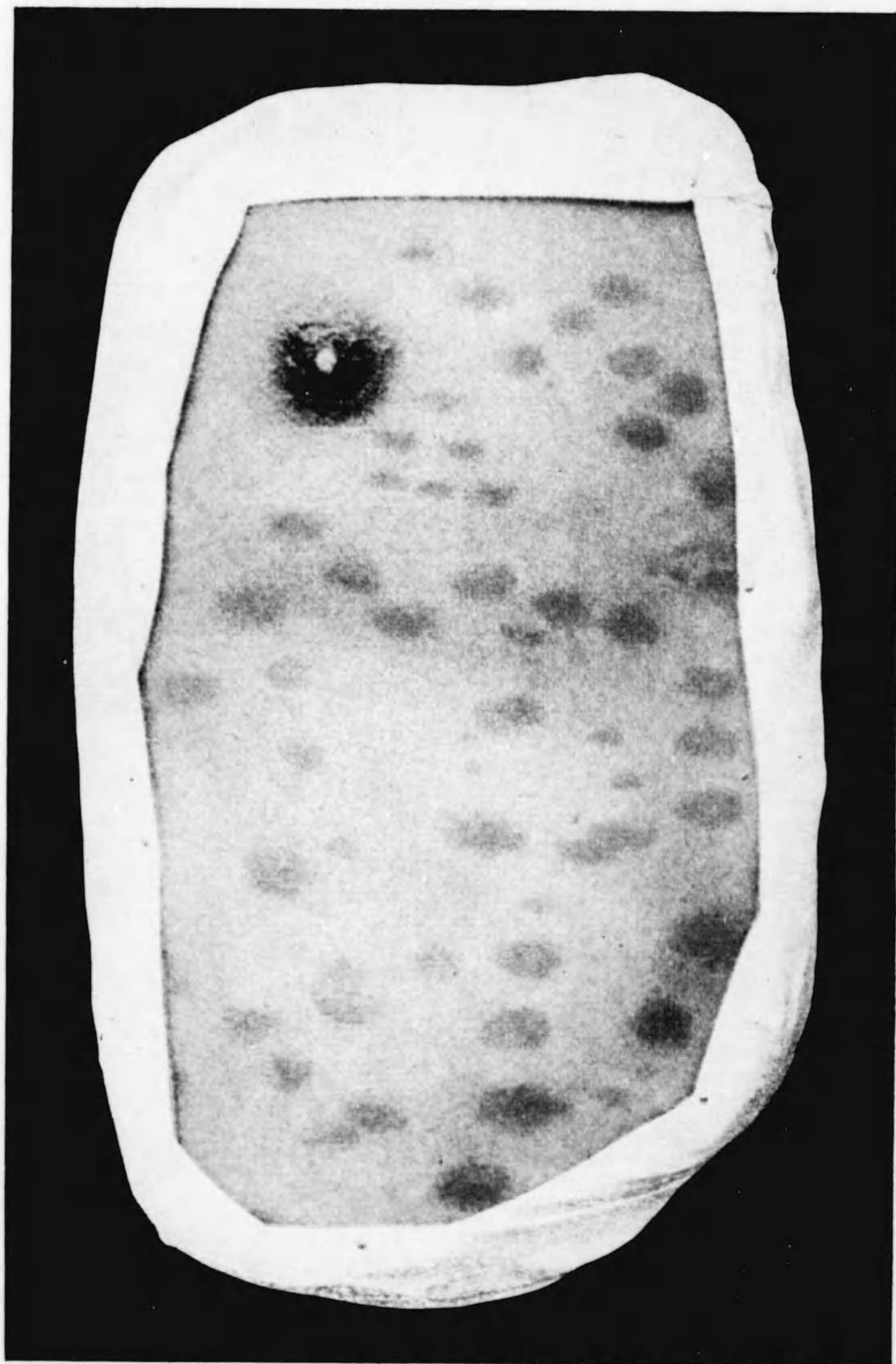


圖 八 第



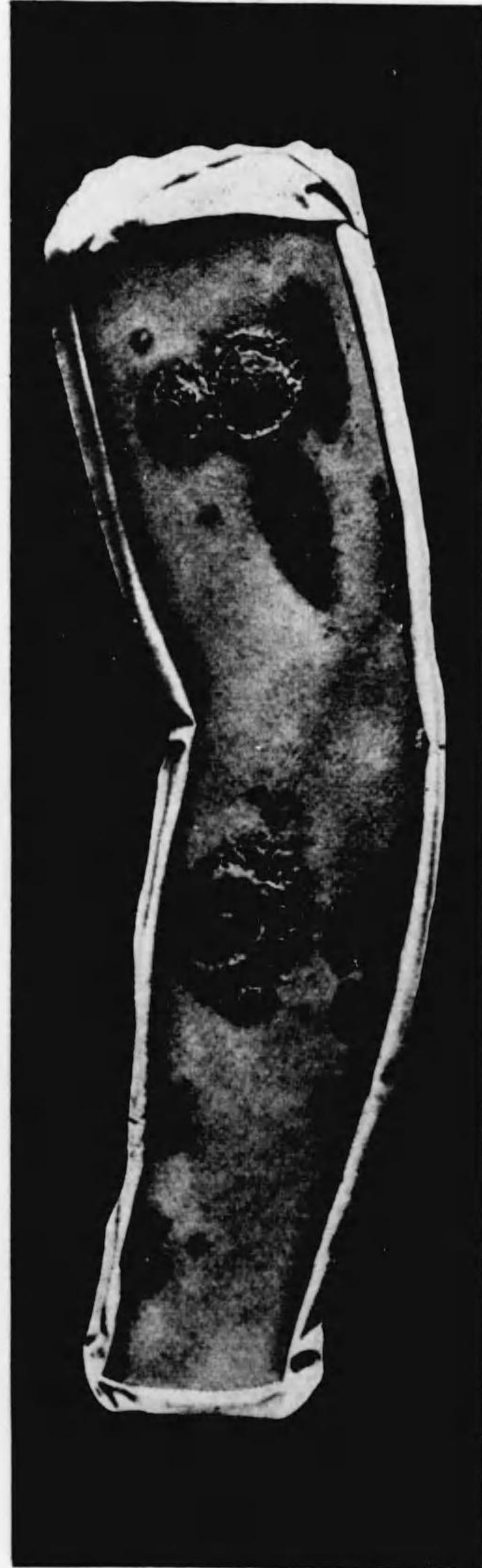
疹 薇 蒿 性 毒 徵

圖 十 第



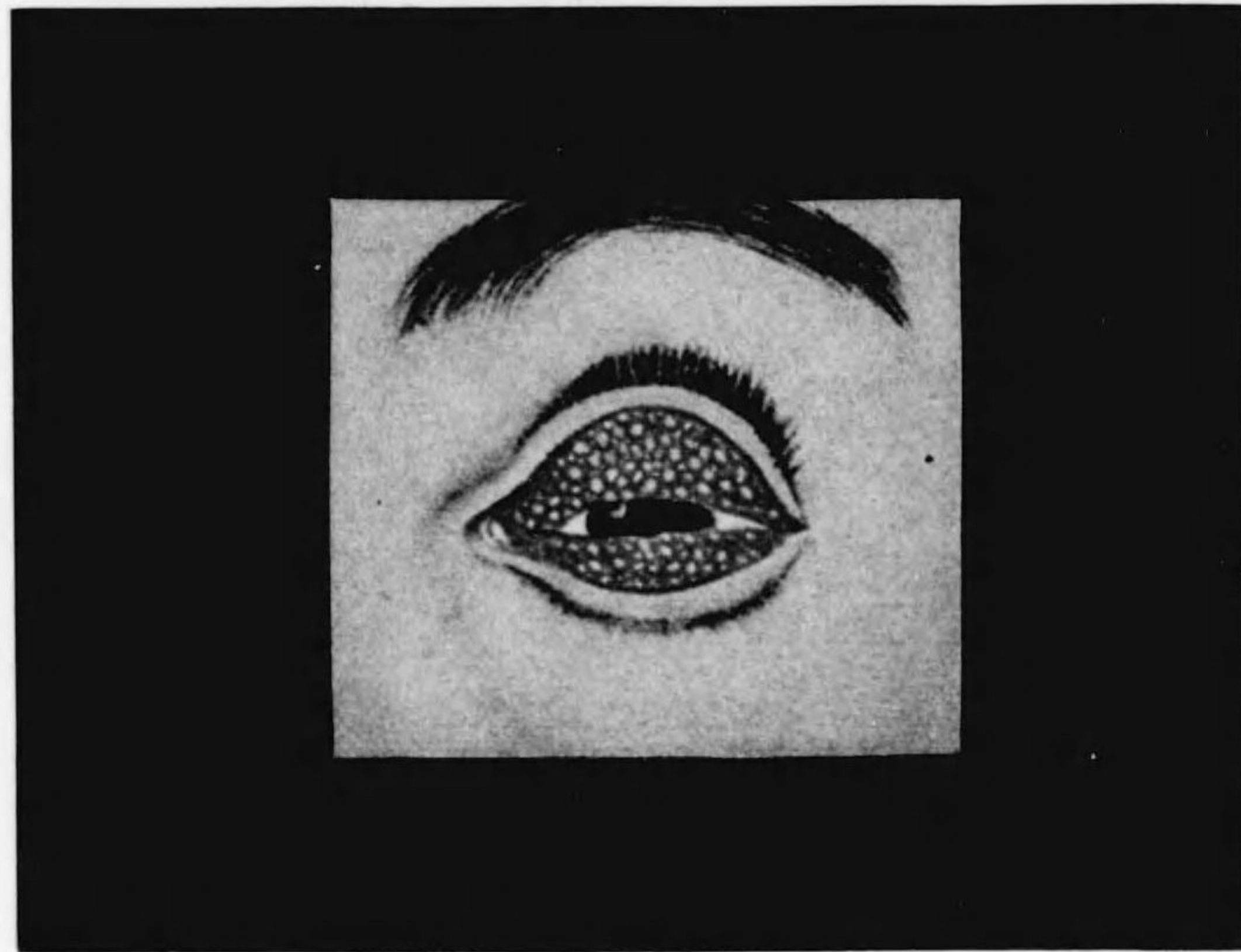
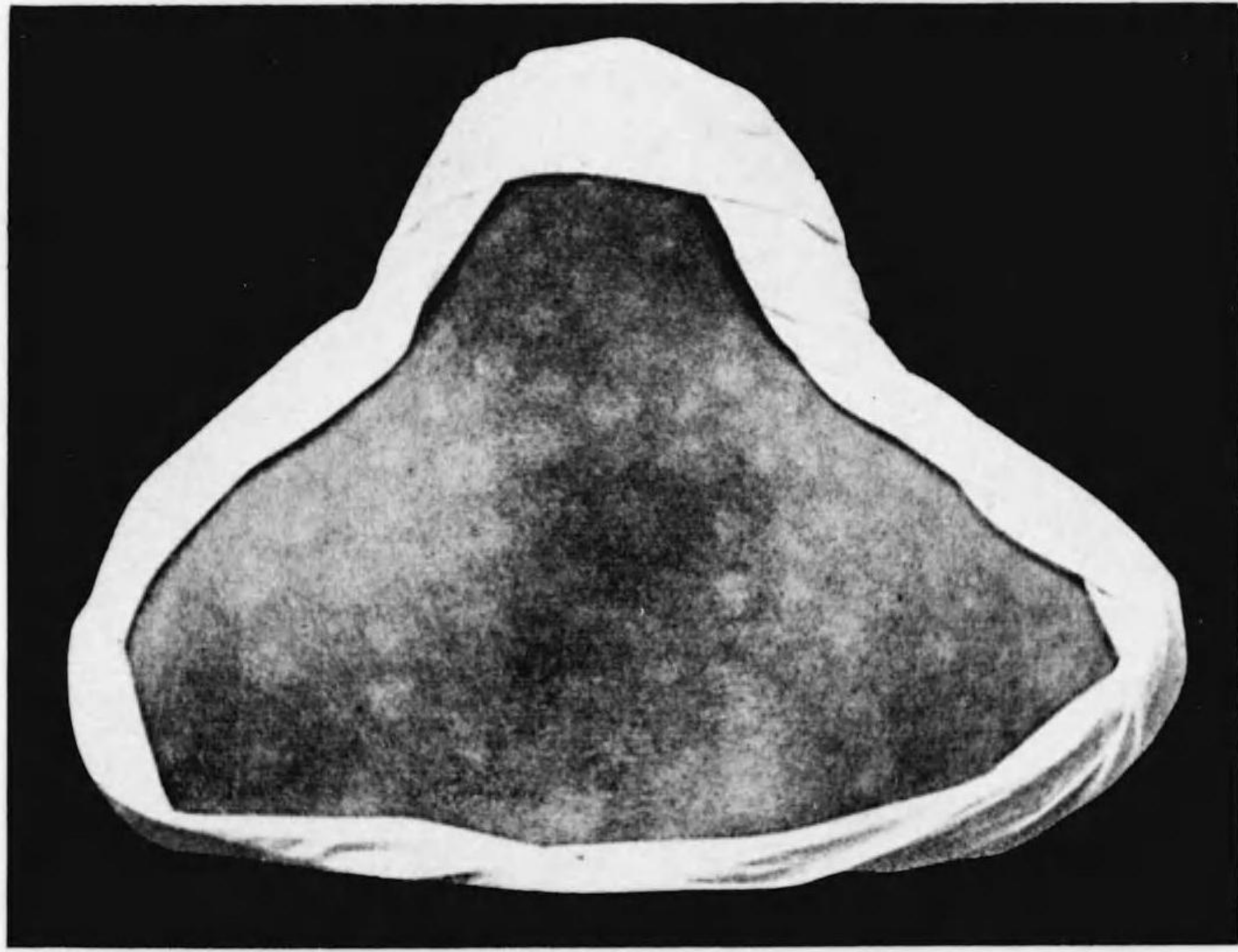
鮮 黃

圖 九 第



疹 疱 膿 性 毒 徵

圖一十第
斑白性毒微



圖二十第
[ムーホラト]

理髮傳染病學

第一編 總論

第一 傳染病とは何ぞ

傳染病とは肉眼を以て見ることの出来ない、極めて微細なる生活體（細菌又は原虫であつて、まとめて「病原體」と云ふ）が人體内に侵入して發育繁殖し、其結果として起り來る疾病で、人より人に、又は動物と人との間に傳播蔓延する病を云ふのである。

第二 原因及誘因

一原因と云ふのは傳染病を惹起すべき病原體であつて、肺結核に對する結核菌、丹毒に對する丹毒連鎖狀球菌の如きである。

二誘因と云ふのは、傳染病の原因である病原體の働きを助けるものであつて、例之、感冒が肺結核を誘發し、單純なる結膜炎が「トラホーム」を誘致し、暴飲暴食の爲胃腸を害して「コレラ」に罹り易くなる如き場合、感冒、結膜炎、暴飲暴食を誘因と稱するが如き之れである。

第三素因

傳染病に罹るには、其人に種々なる弱點を有つて居る、これを素因と云ふ。

一遺傳、肺結核、癩病などは、昔は遺傳病だと考へられて居たが、眞に遺傳することはない、但し肺病の系統の人は他の人よりも肺病に罹り易いことは明かだ、之れを素質の遺傳と云つて居る。

二體質、普通體の弱い人が總ての病に侵され易い事は、誰もよく知つて居るのであるが、之と反對に腸チフスなどは、多く血氣盛の強い人を侵す傾がある。

三性、病氣によつては、男よりも女を多く侵すとか、又之と反對に男を多く襲ふ病氣もある。

四年齢、これは疫癘であるとか、「チフテリア」等は小兒に多い、理髮傳染病中에서도、白癬は殆んど小兒で、其代り圓形禿頭は大人に多い。

五職業、微毒が賣笑婦に多く、脾脫疽が動物の毛皮商に多い等は此例である。

六抵抗力減弱、傳染病になるには、身體が弱つてゐることが一つの條件である、胃腸が弱つてゐると「コレラ」、「チフス」に罹り易く、感冒の爲に氣道を弱くして肺結核に侵され易くなる等である。

第四病原體侵入門

病原體が人體内に侵入するには夫々違つた門戸即ち入口がある、例之「コレラ」菌、「チフス」菌は口より入り、黴毒「スピロヘータ」は皮膚及粘膜より入るが如きである、理髮傳染病に於ては

- 一 皮膚より入るもの、丹毒連鎖球菌、化膿菌、脾脱疽菌、白癬菌、黄癬菌、癩風菌、結核菌、黴毒「スピロヘータ」、癩菌。
- 二 粘膜より入るもの、丹毒連鎖球菌、化膿菌、結核菌、黴毒「スピロヘータ」
- 三 呼吸器より入るもの、結核菌、癩菌等の如きを云ふのである。

第五 潜伏期

一 潜伏期とは病原體が身體の内に這入つてから、いよいよ病氣を起すまでの期間を云ふのである。

二期間の長短

- (イ) 病氣の種類によつて夫々潜伏期間が違つてゐるので、「コレラ」の様に半日か一日位の短いものもあれば、結核、癩のやうに二三年、時には二十年、三十年と云ふ永いものもある。
- (ロ) 同じ病氣に罹つても人によつて潜伏期間が違ふことがある、これは、(イ) 侵入した細菌の数の多いか少ないかと云ふこと、(ロ) 細菌の毒力が強いが弱いかと云ふこと、(ハ) 受けた人の身體の丈夫が弱いかといふ様なことによつて相違を生ずるのである。

第六 病毒排泄路

傳染病患者の身體の内には、無論細菌なり原虫なりが無數に居る、そうして其病原體が患者の身體から外界へ出るのは大抵其方法が決つて居る。

- (イ) 丹毒……………落屑(カサブタ)
- (ロ) 化膿病……………膿汁
- (ハ) 眼の疾患(結膜(ト)角膜(ム)眼炎)……………涙液、眼脂時に膿汁
- (ニ) 肺結核……………唾痰、鼻汁
- (ホ) 糸状菌病……………雲脂
- (ヘ) 黴毒……………膿汁等である

第七 病毒傳染徑路

傳染病の傳播する方法としては(1)直接傳染、(2)間接傳染との二つの方法がある、理髪店舖に於ける例としては

一 直接傳染……………理髪師と顧客との間に於て行はれるもので、理髪師が肺結核患者であるとき、顧客に結核菌が飛沫傳染するとか、顧客が丹毒後に理髪店

舖へ来て、之を理髪師に傳染させる等である。
 二 間接傳染……………顧客と顧客との間、理髪師と顧客との間に於て品物を介して行はるゝものであつて、例へば(甲)の客の丹毒が、理髪店舖の鬚剃ブラッシを媒介として、(乙)の客に傳染するやうなことである。

第八 免 疫

一、免疫とは何ぞ

免疫と云ふのは、人體が、傳染病に罹るべき原因に逢ひ乍ら(例之コレラ菌を呑んだとか、皮膚に丹毒菌を擦り込んだとか)少しも感染しないで、發病を免れて居ることである。

二、免疫の區別

(1) 先天免疫、生れつき得て居る免疫で、人體が豚コレラに罹らないとか、犬

や馬が微毒に罹らない等の例である。

(2) 後天免疫、これは生後得た所のものであつて、これを更に區別して

(イ) 病後免疫……一度傳染病に罹つて夫れが治癒した後は二度と其病に侵されないので云ふので、天然痘や麻疹を経た爲に、此病に罹らないことは誰も知つて居る所である。

(ロ) 人工免疫……種痘、「ワクチン」注射等人の考へで免疫を得させることである。

三、感受性

これは免疫の反對で、傳染病に罹り易い性質を云ふので、一度丹毒に罹ると再び丹毒に侵され易くなるのは、即ち感受性が高まるからである。

第九 理髮傳染病の種類

第一類(細菌性のもの)

(1) 急性

- (イ) 丹毒、(ロ) 皮膚化膿病(瘍癰)、(ハ) 膿漏眼、(ニ) 傳染性結膜炎、(ホ) 傳染性膿癬
- (一) 脾脱疽

(2) 慢性

- (イ) 結核、(ロ) 癩、(ハ) 微毒

第二類(糸狀菌性のもの)

- (イ) 白癬、(ロ) 黄癬、(ハ) 癩風

第三類(寄生動物性のもの)

- (イ) 疥癬、(ロ) 毛虱

第四類(病原不明のもの)

(イ)「トラホーム」、(ロ)「圓形禿頭」、(ハ)「濕疹」

第二編 各論

第一章 丹毒

第一 原因

- 一 病原體 丹毒連鎖狀球菌である。
- 二 侵入門 皮膚粘膜の損傷より入る。
- 三 傳染徑路
 - (イ) 觸接 患者に近寄ることに依て傳染すること。
 - (ロ) 物品を媒介として傳染することがある。
- 四 免疫關係

本病は病後免疫を得られないのみならず、此病に罹る度毎に感受性が高まつ

て、二度三度と罹り易くなるのである。

第二 症 状

(種類)

(イ)外傷性丹毒、(ロ)産褥性丹毒、(ハ)初生兒丹毒

(潜伏期)一日乃至三日

一、熱

悪寒、戦慄により體温が四十度位に昇り、五六日間續くことが多い。

二、皮膚炎

(1)多くは發熱と同時に表はれ來り、發赤腫脹し、疼痛を感じ、光澤を有つてゐる、周圍に淋巴管炎を起して赤色の線を見るし、淋巴腺も亦腫脹する。

(2)部位

多くは顔面頭部に表はれ、一方に色が褪め乍ら他方に蔓延することが多い
即ち少し宛此場所を變ることがある。

(3)特長

本病の皮膚炎は周がはつきりしてゐて、健康なる皮膚との境界が明かである。

三、神經症狀

病の初めに嘔吐をするし、盛りには頭痛烈しく、讒語を云ふことがある。

(合併症)

腦膜炎、中耳炎、聲門水腫、腎臟炎

(経過)

多くは二週以内

第三 理髮師の心得事項

一、此病は理髪店舖に於て業者の手又は理髪器具を介して傳播せしむることがある、故に雲脂取刷毛、剃刀等によりて、客の皮膚を傷けないやう注意すること。

二、此病は一度罹れば感受性が高まるのであるから、一度なり二度なり丹毒を患つた顧客の理髪には特に消毒を厳にし、又皮膚を傷けないやう心懸くすること。
三、病後の顧客には病状を尋ね、少しでも本病の疑があれば消毒を充分にすること。

四、鼻毛、外聽道を剃ることは、此病の豫防から云つても宜敷くない。

第四 豫防法

一、患者を病院に入れるか又は別室に隔離すること。

二、産婦・嬰兒負傷したるものは本病患者に近寄らぬこと。

三、患者の使用したる物品器具及び室は嚴重に消毒すること。

四、一度本病に罹病したるものは常に注意を拂ひ、本病患者に近寄らぬやうにし、又負傷したるときは充分に消毒すること。

第二章 皮膚化膿症

第一 原因

一 病原菌

化膿菌(主として葡萄狀球菌、連鎖狀球菌である)

二 侵入門

皮膚の創傷又は毛孔。

第二 症 狀

(甲) 痤瘡(アクネ)——生理的のものは面皰(ニキビ)

(1) 本病は青春期に於ける脂肪多きものになり、

(2) 顔面背部に好んで發するのである。

(3) 皮脂の分泌多量なる所へ塵埃の爲に「皮脂腺口」を閉塞せられ、其所に化膿菌が侵入して化膿したるものである。

(乙) 癰(瘍)(フルンケル)

(1) 皮脂腺・汗腺・毛囊の周圍に來り、

(2) 圓形の浸潤が出來、發赤、隆起し、疼痛があるし、多くは中央に毛を有つてゐる。

(3) 浸潤の頂にある膿點はだんくく化膿し、膿栓を出して治する、

(4) 顔面に表はるゝものは「面疔」と稱し、往々腦膜炎、膿毒症を起して死するこ
とがある。

(丙) 癰(癰)(カルブンケル)

(1) 好發部位は項部背部である。

- (2) 浸潤硬く、疼痛が烈しく(急に疼痛の去ることあるは却て死の前兆であることが多い)、壊死(組織の一部死)し、瘢痕を貽して治る。
- (3) 膿點の數個あることが特長である。
- (4) 悪寒や戰慄によりて發熱し、體温が四十度にも達することがある。
- (5) 顔面殊に口唇、頭髮部に來るものは靜脈周圍炎を起し易く、死に到らしむる危険がある。

第三 理髮師の心得事項

- 一、理髮器具は常に清洗し、消毒を行ふこと。
- 二、理髮師は顧客の皮膚を傷けぬやう注意すること、(頭部顔面に瘡瘡や癬を認めたるときに、爪又は理髮器具にて搔抓してはならぬ)
- 三、鼻毛耳毛を剃るは宜しくない、之が爲に鼻腔外聽道に癬癬を起すことがある。

第四 豫防法

- 一、常に皮膚の清潔を保つこと、殊に皮脂の分泌の多いものは、毎日二三回石鹼を以て顔を洗ふこと。
- 二、糖尿病患者は癬癬を多く發するから注意せねばならぬ、澤山「オデキ」の出來る人は尿を検査するの必要がある。
- 三、顔面の瘡瘡癬癬等は決して搔抓してはならぬ。

第三章

膿漏眼（淋毒性結膜炎又は風眼）

第一 原因

一 病原體 淋菌

二 傳染徑路

淋毒の爲に汚されたる手指手拭等の媒介によりて傳染するのである。

（初生兒膿漏眼）

淋毒を有する母親の産道を通るときに傳染するのである。

第二 症 狀

（潜伏期） 一日

一、結膜炎

眼瞼及眼球の急性結膜炎を起す（發赤腫脹し、疼痛灼熱の感がある、眼脂が澤山出て羞明、流涙が来る）

二、本症の特長

- (1) 乳頭増殖して天鵝狀を爲すこと。
- (2) 分泌物の爲に睫毛が癒着して眼瞼を閉鎖し、内に膿汁の如き分泌物が澤山溜つて眼瞼を膨隆せしめる。

三、経過

一月位にして治癒することがあるけれども、多くは健眼にも傳染し、忽ち失明するの危険がある。

第三 理髮師の心得事項

- 一、淋毒を有する理髪師は成るべく職業に従事するのを見合すこと、事情止むを得ずして就業する場合には常に手指の消毒を怠つてはならぬ。
- 二、顧客に貸す手拭洗面器は一客毎に清洗するか又は消毒すること。

第四 豫防法

- 一、淋毒に侵されぬやう注意すること。
- 二、淋毒患者は常に手指を清潔ならしめ、日用品を専用として常に消毒せしむること。
- 三、淋病患者の周圍に眼病に罹つたものが出来たら、一刻も早く醫師の診察を受けしむること。

第四章 傳染性結膜炎

第一 原因

- 一、急性性——こつほ、うわーくす氏菌及肺炎菌
- 二、慢性——もらい、あくせんふえると氏菌

第二 症状

- (1) 眼瞼及眼球結膜は發赤腫脹し、涙の分泌が多くなり、羞明があり又眼脂を分泌す、其他眼内に異物があるやうな感又は搔痒を覚える。
- (2) 慢性となれば視力が障害せられ、輪匠筋の搐搦眼の縁がビク／＼する(飛蚊症)がある。

第三 理髮師の心得事項及豫防法

他の眼疾と同じこと

第五章 傳染性膿痂疹

本病はチルプエリーフックス氏の命名したるものであるけれども、士肥博士の研究によれば、白色葡萄状菌性膿痂疹と、連鎖状菌性膿痂疹との二症に分つべきものだとのことである。

(甲)白色葡萄状菌性膿痂疹

第一 原因

- 一、病原體 白色葡萄状球菌
- 二、年齢 小兒に多し
- 三、好發部位 顔面
- 四、流行 夏季に多し

五、傳染徑路

(イ) 觸接、(ロ) 物品媒介

第二 症 狀

一、水疱を作るを特異とし

(1) 水疱の大きさ 始め帽針頭大又は豌豆大であるけれども、増大すれば鶏卵大にも及ぶことがある。

(2) 疱の内容 初めは澄切つた漿液であるも、後には膿汁となる、又一つの水疱中に下垂部は膿であつても、上は漿液をいれることがある。

(3) 發生の時期 一齊でなく、早い遅いがある。

(4) 疱の経過 發生後二三日の頃から液は吸収されて結痂す。

(5) 疱の特長

(イ) 多くは周圍に紅暈がある。

(ロ) 疱と疱との間に健康皮膚の存すること。

(ハ) 痂皮の下は赤色で、濕潤してゐるけれども潰瘍はない。

(ニ) 痂皮が落ちたる後に、淡紅色の色素沈着が残る。

二、稀に發熱することがある

三、自覺症

(イ) 結痂する時に痒感があること。

(ロ) 表皮の剝離した部位が知覺過敏なること。

(経過) 四五日間

(乙) 連鎖狀球菌性膿痂疹 (尋常性膿痂疹)

第一 原 因

一、病原體 連鎖狀球菌

二、傳染徑路 (イ) 觸接 (ロ) 物品媒介

三、好發部位

顔面最も多く、其他身體中の露出部に來ることが多い。

第二病狀

一、疹

初め粟粒大の紅疹を生じ、中心のものから水疱となり、漸次膿疱となる。

二、結痂

膿疱が破潰し、内容物である漿液とか膿汁が漏れて出て仕舞つて、蠟黄色の厚き痂皮を作るのである。

三、痂皮の狀

液の分泌が多ければ多い程痂皮の容積が増加し、時に二錢銅貨大となり、又新舊の痂皮が相重り、相互融合して大痂皮を作るのである。

四、自覺症

痒感を主とする。

第三 理髮師の心得事項

一、小兒の顧客中、顔面に水疱の跡があるとか、又色素沈着の狀を認むるときは特に注意すること。

二、理髮器具は常に消毒するのを忘れてはならぬ。

第四 豫防法

一、本病患者に接せぬやう注意すること。

二、本病に罹りたるときは早く醫療を受くること。

第六章 脾脱疽

第一 原因

一、病原體 脾脱疽菌

二、侵入門

皮膚の損傷及消化器、呼吸器粘膜の傷つきたる所から入る。

三、職業的關係

本病は牛馬取扱業者や、肉類販賣業者に多いけれども、刷毛の關係により、理髮師も亦注意せねばならぬ。

第二 病状

(潜伏期) 三日乃至六日

(甲)局所症狀

一、結節

皮膚面に赤色の結節が出来、中央部に淡紅色又は青色の膿疱を生ずる、結節は初めは小さいけれども漸次胡桃大に及ぶことがある。

二、膿疱

破壊すれば痂皮が出来、周囲は腫脹し硬結を作り、又甚だしき浮腫を呈することがある。

三、自覺症

灼熱又は搔痒の感

(乙)全身症狀

前述の如く皮膚症狀を表したる後、二三日を経て全身症狀を來すのを常とする。

一、熱

高熱を發して來る。

二、精神

朦朧となり、讒語を言ひ、患部の附近には疼痛を發し、全身が衰弱し、約一週にして虚脱に陥り死することがある。

第三 理髮師の心得事項

一本病は刷毛を介して傳染することがあつて、濠洲等では時に問題となることがあるから、心得置かねばならぬ。

二刷毛類の消毒を怠つてはならぬ。

第七章 肺結核

第一 原因

一 病原体 結核菌

二 菌の所在 患者の血液及病竈中にある。

三 排泄路 唾痰(末期には尿管より出づ)

四 侵入門 鼻及口より入る

第二 傳染徑路

一 觸接 (接吻・飛沫傳染最も危険である)

二 物品媒介 (古着・古本・灰皿・煙管等)

- 三 飲食物媒介
- 四 住居傳染

時に自家傳染を見ることがある (其菌が身體の他の部に結核病を有つてゐて)

第三 素因

一 體質 薄弱なるものは罹り易いが、殊に素質の遺傳がある。

二 年齢 若年者は罹り易い

(1) 栄養不良

(2) 運動不足

(3) 採光換氣不良の室に起居すること

(4) 精神及身體の過勞

(5) 病後、分娩後の衰弱

三 抵抗力減弱

第四 症 狀

一 初期 症 狀

- (1) 突然咯血を以て始まるか
- (2) 他の呼吸器疾患に續發するか (氣管枝加答兒・肺炎・肋膜炎)
- (3) 高熱を呈し腸チフスの如くにして始まるか
- (4) 次の第一期症狀の如く徐々に起ることが中々多い

二 經過 による 區別

○ 第一期 (肺炎加答兒)

食慾が進まず、盜汗(ねあせ)胸痛、運動時呼吸促進(いきがはづむ)を訴へ、貧血、瘦せること、輕き咳嗽、少量の咯痰あり、體温は午後少しく上昇するを常と

する(日哺潮熱と云ふ)

○ 第二期

第一期の症狀著明となり、熱は不正、咳嗽咯痰が多くなり、往々咯血する。

○ 第三期

一般症狀不良となつて消耗熱(朝と晩との差が二度以上になつ)を呈し、瘦せ衰へ、呼吸促進、下痢を來し、浮腫が表はれ、遂に衰弱により死亡する。

第五 理髮師と本病との關係

一、本病は理髮師の家庭に甚だ多い、これ日常生活が衛生的でないのと、客より傳染する機會が多いからであらう、故に理髮師は消毒法を嚴守し、豫防法を實行せねばならぬ。

二、理髮師は時々、警察醫の檢診を受ける義務がある、又本病患者なりと診斷せ

られたるときは、營業に従事することは出来ない規定がある。

三、理髮店には法令により「唾壺」を備へ付け消毒する義務がある。

四、理髮師は顔面作業中「ますく」を使用すべきである、これは公衆衛生の爲にも又自衛上にも必要なことである。

第六 豫防法

- 一、體格不良のもの、結核素質あるもの、若年者及病後衰弱者は本病に罹り易いから注意すること。
- 二、身體の抵抗力を強くすること。
 - (1) 感冒を豫防する爲に皮膚の抵抗力を強くすること、冷水摩擦を行ひ、起眠時更衣すること。
 - (2) 呼吸器を強健にすること、常に鼻呼吸をなし、時々深呼吸をなすこと。
- (3) 常に精神を爽快に、又緊張せしめおくこと。
- (4) 其他抵抗力を減弱せしめないやう注意すること。

- 三、食器、洗面器、衣類、臥具等を専用にとすること。
- 四、患者は(1)隔離し、(2)唾壺を消毒し、(3)日用品を消毒すること。
- 五、患者の唾痰の飛沫を吸込まぬやうにすること(何人も本病豫防の爲、唾壺や、便池、下水の外に吐痰してはならぬ)

◎唾痰の消毒方法

一、藥物消毒法 最も多く使用せらるる方法である。

(イ)薬品 二十倍鹽酸加石炭酸水を用ふ

石炭酸 五分
鹽酸 一分

(一) 水 九十四分

(ロ) 分量 石炭酸水は唾痰と同容量を用ふること(投入したら攪きませること)

(ハ) 時間 二時間以上

(ニ) 投棄場所 糞池又は溝渠

二、燒却法 特別なる仕掛により燒却してもよろしい

三、煮沸法 煮ること、(沸騰後三十分以上續けること)

第八章 皮膚結核

第一節 尋常性狼瘡 (狼瘡)

第一 原因

一、病原菌 結核菌

二、侵入門 皮膚

第二 病状

(好發部位) 顔面殊に鼻梁に來ることが最も多い

一、斑狀狼瘡

初期に於ては皮膚に斑點を生じ、褐色又は赤褐色を呈して來る、此斑點部を壓すると、皮膚の深層に硬い小丘疹を觸るのである。

二、結節性狼瘡

斑狀狼瘡が漸次表面に隆起し、丘疹上の皮膚は赤色となり、光澤を呈するに至りたるものを云ふのである。

三、丘疹

漸次吸收さるゝか、表皮剝脱して癩痕を貽すか、結節軟化して潰瘍(くづれる)となるのである。

(豫後)

容易に治癒することはない、又一旦治癒するも再發することがある、又時には皮下の組織に進んで骨にも及ぶことがある。

第二節

皮膚疣狀結核

第一原因

病原體及侵入門は狼瘡に同じ。

第二病狀

(年齢及部位) 中年以前のものに多く來り、手及前膊に多い。

一、圓形なること疣のやうな状態で、中央最も隆起し、だんく周圍に向て低くなり、紅暈を以て健康皮膚と境してゐる。

二、治癒するには中央より結痂(かさぶた)が出来る(癩痕(ひつつり)を貽すのである)。

第三 理髮師の心得事項

- 一、本病は皮膚の傷面より侵入するものであるから、剃鬚時に皮膚を傷けないやう注意すること。
- 二、本病は皮膚に飛沫傳染したる例がある、理髮師は顔面作業時「マスク」を用ふるを良とする。
- 三、理髮器具は常に消毒すること。

第四 豫防法

常に皮膚を清潔にし、傷面は防腐糊帶をなすこと。

第九章 黴毒

第一 原因

- 一、病原體 黴毒「スピロヘータ」
- 二、侵入門 粘膜及皮膚
- 三、傳染方法 (イ)男女關係 (ロ)接吻 (ハ)授乳 (ニ)職業感染 (ホ)物品媒介 (ヘ)胎内傳染

第二 症状

- (潜伏期) 第一期は平均三週、第二期は三ヶ月、第三期は三年
- 第一期 (局所病)

感染したる部位に初期硬結を作り次で潰瘍となる(硬性下疳即ち「かんそう」此際附近のリンパ腺が腫脹する(横痃即ち「よこね」)

第二期 (全身病となる)

輕き發熱を見ることがある、全身各所のリンパ腺が腫脹し、脱毛(微毒性禿頭)發疹(蔷薇疹) 丘疹、膿疱疹等) 白斑 瓜甲炎等を生ずるのである。

第三期 全身に護膜腫を作る。

第四期 時に痲痺狂、脊髓癆となることがある。

先天微毒

兩親殊に母體から胎内に於て感染し、發育不良で、殊に骨神經に變狀を來すことが多い。

皮膚微毒

皮膚微毒の共通點

- (1) 褐紅銅色を呈すること。
- (2) 癢みを覺えないこと。
- (3) 前額、髮際部、手掌、足蹠に好發すること。
- (4) 多形性であつて斑疹、水疱、膿疱を交互に發すること。
- (5) 叢生し易い、即ち密集するか、環狀なるか、蛇行狀を呈して散在することはないのである。

一 微毒性蔷薇疹

- 一 圓形なる紅色の斑點が皮膚の表面から少しく隆起して、壓すると褪色する。
- 二 大きさは不定で、帽針頭大から白銅貨大まで。
- 三 對側性(身體の兩側に並)に出で、背部に多く、兩肢及顔面之に次ぎ、顔面に於ては前額髮際に多いのである。

二 扁平贅肉(丘疹の一種)

一、始めは乾燥した赤色の丘疹であるけれども、漸次濕潤して来て、皮膚面に扁平なる隆起を表はし、粘稠で灰白色なる沈着物で以て被はれ、臭氣が甚しく、傳染力が強いのである。

二、發生部位は兩皮膚面の接觸する所で、即ち陰部、肛門、臍窩、鼻唇溝、口角、指趾等である。

三、微毒性膿疱疹

一、小膿疱疹 第二期微毒の初めの微候たることが多く、有髪部及有鬚部に好發する。

痂皮を作り、癩痕を貽さずして治癒することがあるけれども、時には大膿疱疹となることもある。

二、大膿疱疹 は其周囲が硬く、痂皮を作るけれども、下層には潰瘍を起し、治癒するも癩痕を貽すのである。

三、白斑 膿疱疹が項部の周圍に於て治癒し、始めて茶褐色で、後に白色を呈する斑點を貽すことがある。

第三 理髮師と微毒との關係

本病が理髮器具を介して傳染したる例が少くない、公衆衛生の爲に消毒を勵行せなければならぬ。

第四 豫防法

一、本病患者に接せざること。

二人に接する業務者は時に「職業感染」を受くることがあるから、手指、器具を消毒すること。

第十章 癩病

傳五〇

第一 原因

癩菌である、接觸によりて感染し、皮膚又は粘膜から入るのである。

第二 症状

(素質) 本病には一定の素質があつて、遺傳するものの如く考へられる。

(潜伏期) 二三年以上

(種類) 結節癩、神経癩、混合癩

一 初起症状

知覚異状と云つて、理由なしに蟻走感、疼痛、癢痒等を覚え、其他皮膚が赤くなり、又髮際部・眉毛・睫毛等が脱け落ちる。

二 主として侵さるる部位

(1) 皮膚 顔面四肢に於て暗紫色の斑紋を呈し(獅面癩)、光澤があつて硬くなる。

(2) 神経 知覚麻痺と云つて感じがなくなるが、殊に痛覺を失ふのである。

手足は知覺脱失と營養障害とによつて、時に切斷せらるゝことがある(切斷癩)

(豫後) 早期に治癒せざれば不治の病である。

第三 理髮師の心得事項

本病に罹れば營業を停止せらるゝのである。

第四 豫防法

一 患者を隔離すること。

二 患者の分泌物、排泄物、衣服、臥具を消毒すること。

傳五一

第十一章 白癬

第一 原因

- 一 病原體 白癬菌(トリコヒートン、トンスランスと稱する糸状菌の一種)
- 二 傳染徑路
 - (1) 觸接
 - (2) 物品媒介殊に理髮道具により來ることが多い。

第二 症狀

(年齡) 小兒に多い

(甲) 頭部白癬(シラクモ)

一、皮膚 初め小水泡環を作り、大さ豌豆大から手掌大位で、癢痒を覺え、水泡環となり、膿疱となり、遂に痂皮を作るのである。

二、毛 白色の鱗屑を蒙りたる有様は鞘を被つたやうである、又光澤がなくて塵埃に包まれて居るが如きである、又毛は中途から折るゝことが多い(斷髮癬疹)



スニラセント・ントーヒコリト

(乙) 顔面白癬(ゼニタムシ)
多くの場合頭部白癬から擴がつて來て、顔面頸部に多く發するのである(寄生性 匍行疹)

(丙) 爪菌病

爪は光澤を失ひ、時に色が變り、質は脆くなつて裂けることがある、又缺け易

い。

第三 豫防法

- 一 患者に使用したる理髮道具の消毒を勵行すること。
- 二 帽子、手拭の類を患者と共用せざること。

第十二章 黃癬

第一 原因

一 病原體 「アホリオシエンライニー」なる糸狀菌の一種である。

二 傳染徑路

- (1) 觸接
- (2) 物品媒介殊に理髮道具より來ることが多い

第二 症狀

(年齢) 五歳乃至十五歳の小兒に多い

(素因) (イ) 本病の感染には一種の素質がある、又(ロ) 本病は乾燥せる皮膚に來ること



となく、濕潤軟化する皮膚に限り感染するものである。

一、黃癬小體

毛髮を中心として其周圍に黃癬菌と其芽胞との集りたるもので、初めは極めて小さいけれども、漸次大きくなつて小豆大となる。

二、黃癬小體の特長

- (イ) 如何に大きくなつても、周縁は弓状を呈して居る。
- (ロ) 固有の臭(鼠尿臭)を有すること。
- (ハ) 硫黄色なること。

三、毛髮の變化

光澤を失ひ、脱け易く、時に再生せずして禿頭を生ずる。

四、爪甲黃癬

本病は時に爪甲を侵し、爪を溷濁肥厚せしむることがある。

(豫後)

慢性にして、治療を加へなければ自然治癒はしない。

第三 豫防法

白癬と同じこと

第十三章 癩 風

第一 原因

一 病原體 癩風菌即ち「ミクロスポーロンフルフル」なる糸狀菌の一種



癩 菌

二 傳染徑路

(イ) 觸接 (ロ) 物品媒介 (理髮器具の如き)

三 素因 本病に感染するには一種の素質があると云はれて居る。

第二 症 狀

(年齢) 壯年者

一 發生部位

頭部・軀幹及上肢の屈曲面・股間等である。顔面に來ることは稀で、手足に來ることはない。

皮膚に一種の斑點を生ずるを特異としてゐる。

二 斑點

(1) 大小 初め小豆大であるけれども、後に一錢銅貨大となる。

(2) 發生狀態 廣大なる皮膚面に同時に蔓延する。

(3) 斑の狀態 平滑にして時に光澤を有つて居る、又落屑を生ずる事もあり、搔把すれば上皮は容易に剝離する。

三 自覺症 輕き瘙痒の感

(經過) 慢性にして二十年以上にも及ぶことがある。

第十四章 疥癬 (しつひせん)

第一 原因

一 病原 疥癬虫であつて、表皮層の下に寄生するものである。

二 傳染徑路

(1) 觸接殊に同衾

(2) 時に馬、犬、兎等からも傳染することがある。

第二 病状

一 主症状は瘡痒と發疹なり

(1) 虫の入りたる皮膚に於て甚しく瘡痒を覺え、丘疹を起し、時に「フルンケル」

を見ることがある。

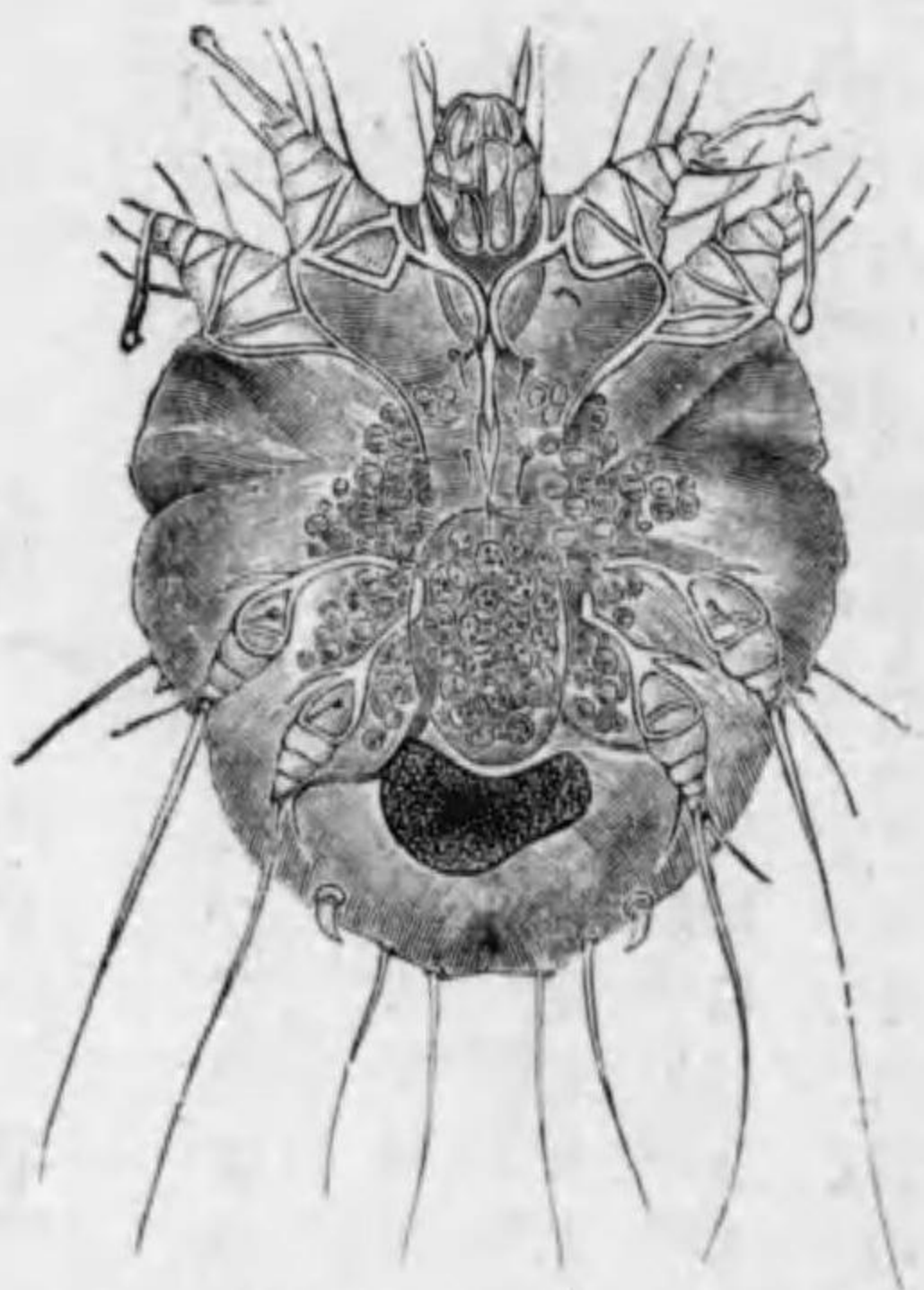
(2) 瘡痒は夜間殊に激しいのである。

二 部位

皮膚の相互摩擦し合ふ如き部位に多い
頭髮部、顔面には皮膚軟弱なる女子、
小兒にのみ來ることがある。

第三 理髮師の心得事項

本病に罹れる理髮師は速に治療を受けなければならぬ、又成るべく業務を休むのが公衆の爲である。



第十五章 頭虱(毛虱)

第一 原因

- 一 頭虱は其色が人種によつて異なつてゐる、即ち白色人種に寄生するものは白く、黒色人種に寄生するものは黒い色をしてゐる等である。
- 二 雌虫は卵を産して毛髪に附着せしめる、一本の毛に數個の卵を附着して居ることがあるが、毛の尖端に近きものは新しきものである。
- 三 卵は六日後幼虫となり、十八日の後成虫となる。

第二 症状

- 一 主徴候 劇甚なる搔痒と濕疹とである。

- (1) 搔痒は虱が皮膚を噛み、又は表皮上を歩行する爲に起るのである。
- (2) 濕疹は虱の咬刺と搔痒ある爲に、爪を以て搔爬することによつて起つて來るのである。

二 其他の症状

附近淋巴腺が腫脹し、眼瞼炎・結膜炎等を見ることがある。
 (此の頭虱以外、稀に眉毛、睫毛に毛虱の來ることがある)

第三 理髮師の心得事項

本虫を寄生せしめつゝある患者を取扱ひたるときは刈毛及器具、手指、布片類を消毒せなければならぬ

第十六章 「トラホーム」 (顆粒性結膜炎)

第一 原因

一 病原體

未發見である、但し病毒は患者の眼の眼脂及涙液中にある。

二 媒介物

患者の眼脂及涙液の爲に汚されたる手指、洗面器、手拭、寝具、衣服等によつて媒介されるのである。

第二 症 状

時に急性に起つて來ることがあるけれども、多くは徐々に發し慢性に經過するのである。

一、結膜 初め上下結膜の移行部が充血し、灰色の顆粒が出來、表面が粗糙となり、病が進むにつれて、結膜中に擴がり、時に乳嘴の増殖を起し、段々不正の癢痕を作るのである。

二、角膜 「パンヌス」を起して濁るか、潰瘍を作り、末期には涙の分泌が減じて、乾燥症となり、失明す。

三、眼瞼 内翻症又は下垂症を起して、瞼裂は少さくなり、瞼縁は糜爛れて來る。

四、睫毛亂生、眼瞼軟骨彎曲の爲に、睫毛亂生する。

(豫後) 失明するか、白斑を貽して治するか、視力が障害せられる。

(経過) 初期に治さないと慢性となり、種々の障害が起つて來る。

慢性となれば殆んど不治であつて、少くとも視力を障害し、時には失明するこ
とがある。

第三 理髮師の心得事項

- 一、他の職業に比し理髮師中には本病患者が頗る多い。
- 二、理髮師は時々警察醫の検診を受ける義務がある。
- 三、本病患者は消毒方法を行ひ、治療を受ける義務がある。又時に營業停止を命ぜらるゝことがある。
- 四、法令上では、原則として貸手拭を禁じてある。止むを得ず貸與したる時は一客毎に消毒すること。

手拭消毒方法

- (1) 煮沸消毒するか
- (2) 熱湯を注ぎて消毒すること

三、手洗鉢は「流出装置」を備へ付くべきことに定められてある。

第四 豫防法

- 一、清潔にすること、居室を清潔にし、時々顔面手指を洗ふこと。
- 二、患者と同居せぬこと、家族雇人に本病患者が出來たときは速に醫師の診察を乞ひ、根氣よく治療を受けさせること、又新に雇人をなすときは眼の健康診断を受けしむること。
- 三、患者と健康者とは手拭、洗面器、衣服、寢具を共用せざること
- 四、他人と日用品を貸借せざること。

第十七章 圓形禿頭 (鬼紙頭)

第一 原因

一 病原體 不明

病原に對しては學者間に二説あり
即ち

(1) 傳染説(病原體があつて、人から人へ傳染すると云ふ説)

(2) 榮養神經衰弱説(榮養神經衰弱に依り、毛母の榮養不給の爲に脱毛すると云

ふ説)

二 素因

本病には素因あるものゝ如く、一度罹患したるものは再三之に侵さるゝことが

あるから注意を要するのである

第二 症狀

一 良性圓形禿頭

一、二錢銅貨大に、一ヶ所又は數ヶ所に脱毛するが、再生することが多い

二 惡性圓形禿頭

多くは頭部の大部分に禿頭し、終生再生しないことが多い

(病症の進行するや否やを鑑別する法)

禿げたる部位の周圍にある毛髮を軽く引きて試むること、直に脱毛するは進行するの兆である

第三 理髮師の心得事項

一、時々流行を見ることがあつて、多くは理髪店舖の媒介する所なりと云はれて居るから注意を要する

二、一度本病に罹りたる客を取扱ふには、手指器具を嚴重に消毒せねばならぬ。又罹患當時の脱毛等は總て焼却すること。

一般禿頭の種類

- 一、老年性禿頭
 - 二、脂漏性禿頭
 - 三、微毒性禿頭
 - 四、癩性禿頭
 - 五、寄生性禿頭
- 其他外傷及疾患より來ることもある

第十八章 濕疹

本病は皮膚病中最も多き病である

第一原因

(1) 外因

化學的刺戟	醫藥用藥品	職業藥品
溫熱的刺戟	寒溫共に來る	
器械的刺戟	摩擦、搔爬、緊縛	

(2) 内因

種々の内科疾患、腺病、寄生虫等

細菌は斯の如き原因のありたる際に寄生することがある

(3) 原因總括

本病には一定の素因があり、素因は濕疹の間接原因であつて、外因は直接原因

因である、又細菌は之を幫助するのである

第二病状

(甲) 急性濕疹

一 好發部位

頭部・顔面・殊に眼瞼・陰部・股間・指趾間・婦人の乳房の下部等

二 主要症状

疹と瘙痒感とである、疹は不規則に散在する

三 疹の経過

(1) 紅斑期 皮膚は發赤し腫脹す。

(2) 丘疹期 小なる疹を生じ、周圍は稍硬く、瘙痒を覺える。

(3) 水疱期 水疱を生じ次で膿疱となる。

(4) 濕潤結痂期

疱は破潰し、疹は濕潤し、漏出液は乾燥して結痂す、痂の色は黄色なるを常とするも、時に綠色、褐色のこともある

(5) 落屑期

痂皮は落屑し、後に色素沈着を貽す。

四 全身症状

時に發熱し、食慾不振、瘙痒の爲不眠を來す、又淋巴腺炎を見ることがある

(乙) 慢性濕疹

一 疹

舊疹の周圍に新濕疹を生じ、時に潰瘍が出来る、頭部の發疹は毛髮と痂皮と膠着して塊となり、皮脂が之に加はつて一種の臭氣を發し、時に毛虱の寄生場となることがある。

二、癢疹

慢性濕疹には殊に甚しく、搔爬すれば不快なる痛みを貽す。

三、皮膚肥厚

皮膚の變化は急性濕疹に等しきも、炎症を反覆するから皮膚肥厚して乾性鱗屑狀を呈することが多い。

第三 理髮師の心得事項

(1) 本病は純然たる理髮傳染病ではないけれども、濕疹の生せる際細菌を寄生せしむることがあるから、器具を消毒せねばならぬ。

(2) 濕疹の生せる際、案に搔爬してはならぬ。

脂漏性濕疹

一、好發部位

頭部、顔面

二、主要症狀

鱗屑を形成し、毛髮脱落し、癢痒を覺える

三、經過

(1) 第一度

色は黃褐色、黒褐色と漸次變化し、鱗屑は遂に痂皮狀となる

(1) 第二度

漸次蔓延するも、疹は尙境界判然として居る

(2) 第三度

疹は濕潤性となる